

に着た着物の踵を氣にして、お峰が自分の肩越しに幾度も幾度もそれを見て居る時、花ちゃんは、

一八六

「峰ちゃん、それではね、今夜は何でも妾に蹴いてらつしやいよ。お客様のお座敷の様子を呑込まなけりやならないんだから。」

と云つた。お峰は大層心丈夫な様な氣がして、

「嬉しいこと。」
花ちゃんも彼方のお座敷、此方のお座敷と、他の女と同様に、お酒を運んだり、お肴を持つて來たりしたので、お峰もそれを手傳つて、幾度か廊下を行つたり來たりした。

ゴタ／＼して居る内にモウ大分夜が更けて十時過になつた時、花ちゃんは「今夜は大事のお客様のお座敷に出るんだから。」

と、云つて身繕ひをして、熱いお燗の出來た徳利を持つて、裏座敷へ行つた。廊下へ一寸踞んで障子をスーと開ける様子をお峰は見つて、學校で作法の時に桑田先生から襖の開け方を教へられた事を思ひ出して、

「行儀が良いのねえ。」

と、思はず獨語ちた。花ちゃんはスル／＼と中に入つて、お峰をも入れて障子を締めて、徳利をチャブ臺の上に乗せて、

「まア嬉しいわ、好く來て下さつたのねえ。」

と、突然お客様の膝へ其兩手を投げる様に載せ掛けた。

「御挨拶もせず……」

と、お峰は花ちゃんの急に變つた不作法に驚いた。

「は／＼、矢つ張來たよ。君の引力には敵はん。」

と、お客様は大きな聲で笑つた。

「厭よ、憎らしいツ。」

と、花ちゃんは突然お客様の膝の上の方をつねつた。

「あ痛ツ。」

と、お客様は跳び上つた。

「まア亂暴を。」

と、お峰は喫驚して了つた。一番大事なお客だど云ふのに何と云ふ亂暴な花ちやんであらう。氣でも狂つたのではあるまいかと、大きな目をして花ちやんを見ると、花ちやんは如何したのか兩方の目に涙を一杯湛めて、『今頃まで何處かで浮氣して來たんでせう。こんなに遅く來るなんて……妾口惜しいわ。もう來て下さらなくつても可い事よ。』

お峰は益々呆れて了つた。
 『姉さん、そんなに怒らないで下さいな。お客様に悪いから。』
 『は、い、い、いやア歸らうか。』

と、お客は態と立たうとした。
 『知りません。』

よど、花ちやんはお客の袂をグイと捉へて、疊の上へ顔を押し當て、泣いた。
 『姉さん悪いわ。お客様が怒つてらしやつてよ。』
 『いゝのよ。』

儼む様に目を舉げてお客の顔を睨んだ。お峰も恐はしく目を舉げると、

お客は擬ふ方も無く信託會社の落合虎雄なのである。曩に兄の怪我した時に一寸見舞ひに來た其人であつた。落合はそんな事とは氣が付かぬらしく

『おい花公、怒るなく。さア仲直りだ。一杯ついでくれ。』

『姉さんお酌して上げて頂戴よ。』

花ちやんは涙を拭いて、

『浮氣すると聞きませんから。』

と、又落合を睨んだ。

『然う睨むなよ。女つ振が下がるぢや無いか。』

『可いのよ、どうせお多福ですから。』

『馬鹿に突掛るぞ。今夜は餘つ程虫の居所が悪いと見えるな。』

『虫の居所だつて悪からうぢやありませんか、人の氣も知らないで、今頃まで顔も見せないなんて……』

『おつとモウ止した、そんな話は……それはそうと此娘は何だい。』
 『妾の妹なの。どうぞ妾同様に御最負をね。』

と、嫣然と落合の顔を見上げた。

「妹だつて？」

「はア何分よろしく。」

花ちゃんはお峰の方を向いて、

「お願ひ申しますッてお言ひなさいよ。」

「何卒お願ひ申します。」

と、云つてお峰は紅くなつてビツタリお辭儀をした。

「お、美しい娘だ。は、は、は。」

落合は心地よげに笑つて、頻りに盃を口に當てゝ居た。

八 主任の地位に居る有難さに

信託會社の落合虎雄は毎日賣新亭へ入浸つて居た。そして大概の晩には其處へ泊つて、朝になつてノコノコと會社に歸つた。主任の地位に居る有難さには、こんな放埒に對しても誰一人苦情や意見を試みるものは無いの

で、落合は帳尻を胡摩化しては……と云ふよりも近頃は大びらに……其遊蕩費を會社の金庫から掴み出して居た。けれども村民から搾り上げる會社の儲けは、落合一人の飲食で差響の起る様なケチなものでは無かつたので會社の重役たちも、落合への勉勵賞與位に心得て、別段それを咎め立てする程の考へも無かつたのである。

或時花ちゃんは消渴の氣味と云ふので三四日寢込んで了つた。其間落合は、每晚來ては飲んで居たが、其お座敷は花ちゃんの代理とあつてお峰が出て居たけれども、落合はいつも詰らなそうな顔をして間もなく歸つて行つて了ふのである。お峰が、歸る落合を表から送り出して了ふと、帳場に座つて居る内儀さんは、何時でも、

「峰ちゃん、一寸。」

と、小手招きして、お峰が其傍に腰を屈ませるのを待つて、小さな聲で、「お客様は何にも言やしなかつたかね。」と、聞くのであつた。

「さしえ別に。」

と、お峰が答へると、

「そう。お客様が成るだけ永く居て下さる様にね、よく御機嫌を取つて、少しくらゐる無理を言ひなさつても、言ふ事を何でも聞いて上げるんですよ。些とは辛い事があつても、言ふ事を叶へて上げてと、嬉しい御褒美を頂けるんですよ。」

と、何かお峰には解らない謎みたような事を言ふのであつたが、其處にお峰は、自分の愛想の悪いために、花ちゃんの時よりかもお客様が早く歸るのであらうかと、内儀さんの一言一句が氣になつて、

「妾、一生懸命にお世話するんですけど……」

と、泣き出しそうに言ふと、内儀さんは、
「嬰兒ちゃんね。ほいほい。そんなに怖がらないで最つと仲よくして上げれば可いんですよ。落合さんを兄さんでも思つて、偶には我儘も言つてやるんですよ。然した方がお客様は嬉しがらるからね。」

お峰は花ちゃんか落合に甘へて泣いたり拗ねたりするのを思ひ出した。そして夫を却つて落合が喜ぶ様子のあるのを、今迄は唯だ變だと計し思つて居たが、今内儀さんの言葉で、成程そう言ふものなのかと考へた。そして自分も是からは然してお客様を喜ばせて、内儀さんにも褒められようと思つて心を決めた。

「けども、妾耻しいんだもの。」

お峯は心の中に、可愛らしい女の嬌羞や、甘つたるい言葉遣ひを考へるのである。

「内儀さん、妾今夜からして見ますわ。」

「ほい、そんなに早く出来るの。まあ傑いわねえ、何にも怖い事無いんだから、何でもお客様の言ふなりになるんですよ。」

「えい。」

お峰は僅かの間にモウ大分子供らしい處が無くなつて、成人みたいな言葉づかひや表情やを覺えたのである。

其晩も落合は例の通りやつて来た。お峰はいそ〜とお座敷に出て、何時もに似合はず。嫣然しながらお酌をするのである。盃の数の加はるにつれて落合は酔つた目をお峰の上に据ゑて、シロ〜と見つめるので、お峰は長い袖に顔を半ば隠して、

「厭よ、そんなに見ちや。」

「は〜、今夜は峰ちゃん、一段と美しくしいよ。」

「は〜、そんな事ありやしないわ。」

「は〜、だが滅法今夜は機嫌が好いちや無いか。」

「だつても……」

「だつても何だい。」

お峰は紅い顔をして、ちよいと踟躇つたが、

「妾、好きになつたんですもの。」

「好きになつた、誰を？」

「知りませんわ。」

「ほう、知りませんか。いや面白い。俺も頗る好きになつたよ。」

「あら誰を？」

「知りませせんわ。は〜。」

落合は大口開いて笑ふのである。

「まア、人の真似なんかして憎らしいのね。ねえ真に誰をなの？」

「直き近所に居る人をさ。」

「近所つて何處？」

「俺の目の前に。」

「あらア。」

と、真紅になつて俯向くお峰の美しくしい襟足を落合は眺めて居たが、ツイと猿臂を伸べて、其細い頸を我が二の腕に搔込んでグツと引寄せた。

お峰は驚くかと思ひの外、黙つて客の爲す儘に任せた。落合は搔込んだお峰の頸を我が顔の邊りに持つて来た。

「ま、お酒臭い。」

ど、お峰が感める顔に、

「峰ちゃん、

嵐の様な酒の息をお峰は嗅ぎ乍ら、

「え、

.....?」

落合は愕然として目を睥つた。

「ねえ、可いでせう。」

「落合の驚いたのにも拘らず、お峰は反つて平氣である。可愛がるよ云ふ

言葉も、言ふ事を聞くと云ふ言葉も、泊つて行くと云ふ言葉も、お峰には

哀れ普通一遍の意味にしか解釋が出来ぬのである。

落合は好奇心を動かして、

「うむ.....」

「.....内儀さんも喜んでよ。」

「ぢや峰ちゃん、當座の御褒美に之をやらう。」

ポカリ一圓紙幣を投げ出した。

「あら、こんなに載いて可いの。」

お峰の顔は無邪氣に輝やいて居た。天使の様な少女の心に夜半の嵐の如

何なるものであらうかなどは、想像だも及ばぬ所であるのだ。

九 闇の中に娘が蹲んで泣いて居る

村長の家の裏座敷に下宿して居る桑田照子は、今日此頃の出來事を考へて、今宵も寝られないので、獨り轉輾反側、既往將來の事など思つては幾たびか寝返りして、無念の涙に枕を濕はすのであつた。

家の人は疾く寢静まつて、廣い家には、今しがた十二時を打つた柱時計のカチ／＼秒を刻む音より外には、何にも聞えないのである。照子はフト物音を聞きつけて耳引立てた。サラ／＼と落葉の風に舞ふらしい響、それより外には何も聞こえない、と思ふと又何やら人聲らしいものが耳に入

る。枕を擡げると、表の戸の隙から、小供の聲の様なものか洩れて来る。それが聞こえては又聞こえなくなり、暫らくすると又聞こえて、其間々には女の兒の顛欷くらしい微かな聲も洩れて来る。

「おや、何だらう。」

照子は薄氣味悪るそうに枕を上げるのである。

「先生……先生……」

戸外の聲は絶えては續いた。

「妾を呼んでるのか知ら。」

照子は静かに夜具を挑ね除けて起き直つた。

「先生……桑田先生……」

確かに女の兒の泣く聲である。照子は寢衣の上に羽織を引掛けて、椽側に傳ひに聲のする戸の側まで行つた。

先生……」

と、訴へる様な聲が涙まじりに又戸の隙から聞こえた。

「誰方？」

と、戸に手を掛けて照子は第一に此う聞いた。

「先生ですか。」

「はア然です。」

戸外ではワツと泣き倒れた。

「誰方？」

と、此う云ひ乍ら照子の手は早くも戸を引開けるのである。鴉羽玉の眞の闇の中に、室の障子を透した弱い電燈の光線がさして、ボンヤリと明るくなつた中に、見れば一人の娘が蹲踞で泣いて居るのである。照子は透して

「えい。」

小娘は尙ほ戯々くるのである。

「如何して此んな夜中に？ 兎に角ア中へお入んなさい。」
お峰の手を取つて雨戸の中へ入れれば、お峰は足袋跣足の泥を拂つて、

「先生、妾どうしませう。」

止めても止めても止まらぬ涙に殆んど身も浮く計りである。照子は我室にお峰を伴ひつゝ。

「峰ちゃん、眞乎に如何したの？」

と、諷ねられて、

「妾逃げて來たんです。」

と、又訊しきり泣くのであつた。

「何したの？」

「妾辛くつてモウ我慢が出来ないもんですから……」

「賣新亭の内儀さんが酷い事でもして？」

「いゝえ内儀さんは好い人なんですけども……」

「おや何がそんなに辛くつて？」

「お客様が無理ばつかり。」

「無理ッて如何な事？」

あの……」

涙に濕つた頬を一時にサツと染めて、お峰は言ひ淀んだのである。

「ねえ、如何な無理を言つたの？」

「あの……一緒に……」

「一緒に如何して？」

「一緒に……一緒に寝ろツて言ふんですもの。」

お峰は再び涙を瀧の如くに落すのである。

「まア？」

照子は驚きと怒りとに、其美しくしい眼を峻しくさせて、

「それで内儀さんは何と言ふの？」

「内儀さんは何とも言やしないけども、お客様の言ふ事は何でも聞かなければ不可いッて言ふんですから、妾内儀さんには黙つて居るの。」

「に、憎いお客ね。無垢な峰ちゃんを、可ござんすよ、そんな處へはモウ妾がやらないから峰ちゃん安心して妾の處に何時までもお出でなさい。」

お峰は始めて涙を拭いて、

「先生、妾、家へ逃げて行かうと思つたんですけれど、遠くつて怖いんですもの。何卒濟みませんか……」

「え、可ひござんすよ。だが、貴女そのお客の名を知つて？」

「え、落合ッて人ですわ。」
「え、落合？ 憎い、憎い奴だ。峰ちゃんモウ賣新亭なんぞへ行くんぢやありませぬよ。妾の處に居て學問を勉強して立派な人になるんです。明日から學校へやつて上げるから。」

お峰の顔は何時しか晴れ上つた。

十 前借さへして御座んせんこ

お峰は嬉しげに照子の顔を見上げて、

「先生、眞乎に置いて下さいませすの。そんなら妾、精出して學校へ行つて勉強しますわ。」

「峰ちゃん、眞乎に口惜しいぢやありませんか、女と云ふものは皆な男子の翫弄物になつて居て、何でも男の言ふ事を聞かなきゃならないんだもの。峰ちゃん、確乎して之から一心に勉強しませうね。」

「だけど先生、妾がお世話になると、先生お金が掛かるんですわね。妾どうしようか知ら。」

「そんな事、峰ちゃん介意やしないんだけど、お父さんが何と仰言るか……可いわ、妾が行つてお父さんに話して、峰ちゃんを貸して貰ふ事にするか。」

照子はお峰を我が床に共に臥させて、夜が明ると春日區のお峰の實家を訪問したのである。照子がお峰の實父に逢つて、昨夜の顛末を話して餘り氣の毒だから自分の處へ引取つて暫次教育してやりたいと申出すと、父は「御親切は、先生さん、實に有難いで御座います。御座いますだが實は……」

とサモ言ひ悪くそらに、

「實は賣新亭の方から昨夜遅くに使ひがありましたして、お峰が見えたら直ぐ歸して呉れる様につて申してまゐりましたで……」

「ですけれど、歸したら又何をさせられるか解らないぢや有りませんか。」

「それも然ですだが、何分前借がしてありますだで……先生さん、如何も浮世は自由ならぬもので御座ります。」

父親の冷淡なのに照子は寧ろ呆れて、

「ぢや如何しても賣新亭へお返しになるので御座いますか。貴方の大事なお娘子の一生の大切な事でせうと思ひますから、其處は失禮ですけれども能く考へて頂かなければなるまいと思ひますが。」

「御親切は重々此親父が身に染みて有難く存じます。何分どうか悪く思つて下さいません様に……前借さへして御座んせんですと、自分の勝手にもなりますですが、さも御座いませんと、詐欺の告訴をすると云つて居りますで……」

「賣新亭ですか。」

「はい、左様に御座います。」

「まア。」

照子は呆れて言葉も無く、歸つて行くのである。村長の家の敷居を跨ぐ

と、お峰は待ち焦れて、

「先生、何と言つて？」

と、聞くのであつた。

「駄目よ。賣新亭へ歸れつて仰言るの。」

照子の痛ましそうな顔を見て居るお峰の目には早くも涙の一杯に溢るのが見えた。

「峰ちゃん、心配しなくても可いわ。心配せず何時までも此處に居れば……」

いゝえ、妾、歸りますわ。」

がばと其處に泣き伏した。

「妾、賣新亭へ歸りますわ。妾さへ歸れば、先生にもお父さんにも御心配

を掛けずに済むんだから。」

「そんな鬼の巢に歸れますか。」

お峰は決心の顔を上げて、ツイと立上つた。

「先生、妾歸るのよ。」

「歸るたつて、若し又昨夜の様な事があつたら如何しや。」

「その時は又逃げて來ますわ。」

「然う、然なら可いけど……。」

「逃げて來ますから、先生その時はモウ一度入れて頂戴ね。」

「え、何時でも逃げてらつしやいよ。そうしたら今度は村長さんにお願ひして賣新亭へ直接に談判つて上げますからね。」

小供心の移るは早く、お峰はモウ涙を收めて、身繕ひをするのである。

「ではね、峰ちゃん、何時でも逃げてらつしやいよ。庭を此方へ廻つて、妾の室の雨戸を叩くんですよ。」

照子は不安心ながらも、猥りに人の子を留めもならぬので、お峰を送り

出して、やがて出勤の用意に取掛つた。

其晩、照子は心待ちにお峰の逃げて來るのを待つて居たが、遂に來なかつた。

翌る晩も、其翌る晩も待つて居たが、お峰はモウ二度と賣新亭を逃げ出さぬと見えて、其後何の音沙汰も無かつた。

田園の開発の 吾徒は屢々田園に於ける教育家及び先輩なるもの、口より左の如き言を聞きさるゝ事がある。

「某の家の息子は利口だ、天才だ、百姓させて置くのは惜いものだ。と、何ぞ其認れるの甚しきやだ。百姓とは利發な青年、天才智識を有する青年が成すべきもので無いかの如き認見、即ち舊思想に囚はれて居る人が、今尙夥なくないと云ふのは實に殘念だ、利發な者が百姓するのは惜いて云ふ一言、實に我が農業を侮辱し、田園を賊する不都合千萬の言ひ草じやないか。今に學者の生産過剩を來し、其賣り口に困つて居る時代だ、今の時代に於て最も痛切に其必要を感じて居るものは、土と接觸する事を恐るる學者にあらすして、田園の實務に精通せる、そして其素肌が土と相接することを以て誇とするの自覺ある篤農の輩出せんことだ。利發な青年をして、益々其天才を農業の方面に向つて發展せしめ、田園の開発、農民の指導を以て人生の最大快事たるの自覺を與へなくてはならぬ。」

(田園生活)

(表圖の味趣)

人十六年中勤勞時間



第七章

一 滞納處分

村の不和合は、正月までも不景氣に終らしめたのである。けれども時節は争れぬもので、ハヤ梅がチラホラと咲き初た。明星村の役場では年度換りが近づいたので、諸帳簿の整理や、税金の取立準備やりに、多忙を極て居る。殊に今年には數年に亘た滞納金を、奇麗に始末をつけて了たいと云ので、徴税係の書記と收入役は、夜を日に繼いで、古い帳簿を繰て居る。

二月の中旬になつて役場は愈々督促令狀を方々の家に配つた。それを見た家々では、こんなに滞納して居る筈は無いかと怪訝の顔をする者もあつた。こんな古い税はモウ納めなくても可いのかと思つたと翻す者もあつた。これを一時に納めるとは役場も餘り無理だ。競賣にならうが差押へに逢はうが迎も我家などでは納め切れないと泣く人もあつた。岡本の家などへも六年以前からの滞納金が十二圓七十五錢と督促手数料十錢とを納めると

云つて来た。

若し二月二十八日限り納めなければ差押の處分をする

二一〇

てあつた。滑稽なのは死んだ太藏の家にも八圓ばかりの滞納があるとして、督促令状を持つて来た役場の小使は、屈先の無いのに困り切つて、其令状を組長の處へ預けて行つた事である。組長は初め小使に預かつても困るから役場の方から閻魔の廳へ直接に郵便で送つた方が可からうと、捕掇半分に断わつたのであるが。小使はそれでは叱られるから、兎に角一時預かつて貰ひたいと云つて、令状を置いて逃げて行つたのであつた。

役場の調査に依ると、既往十ヶ年の間の滞納が一萬五千圓もあつて、戸數に割當てると、八圓なにかし平均になるのである。今年には學校の建増をしなければならぬので、どうしても之を整理して財源を作らなければならぬ。滞納者の内には随分富裕な生活をして居る者もあつて、要するに出来ないからの滞納では無く、横着で村民の義務を重んぜぬのであるから、此際断然たる處分をして、此様な弊風を一掃しなければ、他町村に對する面目も立たぬと云ふのである。

納期の月末になつたけれども、納まつた金高は十分の一にも足らなかつた。

納まつた金高は十分の一にも足らなかつた。役場の強硬な方針を洩れ

聞いて、澁々乍ら競賣の耻を晒さぬ内にと大抵納め入れたのであるが、大部分の滞納は、役場員の云ふのとは反對に、實際納め得ないからの結果と見えて、督促令の脅し文句も根つから効を現はさず、滞納は矢張滞納で、どうく月を越して了つた。収入役は一方ならず憤慨して、此上は豫定の通り断然競賣の處分に出るより仕方が無いと言張つた。村長は、

「平山君、納まらんものは畢竟納め得ないからだから、まア君そら憤慨せんでも可からう。村治と云ふ事は税を取立てる計りが能でも無いのだから、宥めたが、平山収入役は頑として、

「いや大和さん、それぢや威信が立たんです。一旦やると云つて置いて、」

「けれども君、まア村民の懐工合になつて考へてやらなければ可愛そうぢや無いか、町村公吏たる者は先づ第一に村民に同情が無ければ不可ん。」

「ぢや大和さんは私が村民に同情が無いと仰言るですか。」

「いや然云ふ譯ぢや無いが、理窟一遍で村は治まるもんぢや無いですよ。熱烈な同情と、それから行渡つた常識とで以て、大目に見る處は見ると……」

「すると法令を無視してもよいと云ふんですね。」
平山收入役は大きな目を据ゑて村長を睨んだ。

「然ぢや無い……が法律規則と云ふものはホンの定規と思はなければならん。君方の様に順境に大家のお妨ぢやんで育つた方には、貧民の懐工合はお解りになりませぬいけれども、取れる時に取る……畢竟出し得る時に徴収してやると云ふのが、租税の秘決で、出せぬものを無理に取るのは收斂と云ふもんですからね。」

「收斂でも何でも大和さん、此際取らなければ、村の財政は立ち行かぬのです。私だつて何も自分の利益になるんぢや無し、憎まれ者になりたくはありませぬけれども、是も役なら仕方がありませぬ。」
「それ迄に仰言るなら、まア今度は仕方が無いんでせうが……まアやつて御覽なさい。」

役場では村長の名を以て、三月に入つて間もなく差押處分の執行を裁判所に申請した。手續は總て迅速に運んで、其の十一日には某と云ふ執達吏代理が此村に臨んで、役場の徴税書記と共に村内を巡回して、片端から封印を付けて行つた。駐在巡査は護衛の爲めに、執達吏と一緒に歩いたので巡査も書記も執達吏も、忽ち人民の怨みのために了つた。

二 尊き犠牲の血

村の人は二人寄ればモウ差押の評判であつた。

「全體村長さんが宜しくないだ。六年が間も打捨つて置くど云ふ法があるか。」

と、一人が言ふと。

「いや然でねえ。今の村長は去年出た計りで、前の事は知らねえのだ。」
と、一人が言ふ。

「知らなきや捨てどくが可いぢや無いか。今更おせつかいに古い創を洗ひ

立てるにも當るめえ。』

『と云つて、取るに不思議も無いわね。』

『何だ此の役場の犬め。』

『は、宛で役場と村の人が敵同志だから可笑し。』

『是ど云ふのも村長の野郎が悪いだ。』

役場の内部の様子などは村民には解らぬので、可愛そうに、村民の當の

敵は、事實一番の味方である所の村長大和であつた。

村長に對する憎しみは懸て學校の校長の上にも及んで行つた。此のセチ

辛い世の中に學校を建て増さうと云ふのからして、既に間違ひである。學

校の建増があればこそ、何時か日にも無い強制執行なども行はれるのであ

ると、村の人たちは——無智な村の人たちは、一樣に小林校長を怨んだ。

それが義務教育年限の延長やら學齡兒童の増加に伴ふ必然の結果であると

云ふ事が、如何して無學文盲の人民に解らう。殊に山梨訓導は村の人に逢

ふと、

『今年の様な不景氣の時には、私個人の考へとしては、學校の増築などは

先づ見合はす方が宜くは無いかと思ふんですが……』

など、誠しやかに言つて居た。心のある小數の人は、見え透いた山梨の卑

劣な心を憎んで居たが、大部分の戸主連は、密かに山梨が校長になつたら

村も助かるであらうなどと、あらゆる事を考へて居たのである。

差押へられた家々の、畑、農蠶具、家財などが、競賣に附られる日が愈々

近づいた。村民の三分の二は、多いのと少ないのどの差はあるが、大抵は

差押を受けたので、競賣の日の近くなるに連れて、段々役場や學校を批難

する不平の聲が大きくなつて來た。小川の區民などは、寄り／＼評議を凝

らして、愈々競賣が始まつたら、東圓寺の鐘を鳴らすのを合圖に、一同寺

に集まつて、朝日へ押寄せて行つて、學校を破壊さうと云ふ相談をした程

であつた。

小川の人民が學校を破壊さうと云ふ様な亂暴な評議をしたのは、今に始

まつた事では無く、古い昔から學校に對して、其區民は一種の敵氣心を持

つて居たのである。と云ふのは、現在尋常高等小學校のある朝日と尋常小學校のある春日と此の二個所に學校を置くのは、一村の和合と教育の統一と、又村の經濟上から云つても不都合だと云ので、五年前に朝日の學校を新築する時、小川の區民は一村の中央たる小川に此二校を合併して建てるのが至當であると云つて、熱心に運動したものである。處が遂に朝日區や春日區の運動が効を奏して、矢張り學校は昔の儘双方に建てる事となり、朝日の方へは朝日と夕月と小川の子供を入れ、春日には、春日秋山兩區の子供を收容する事となつて了つたので、小川區民は大に憤慨して、それ以來は學校の事と言ふと、事毎に反對や妨害をする習慣になつてゐるのである。年度末の事務の忙がしさに、大和村長は夜れそく役場を出て我家に歸らうとする途中、直ぐ役場のそばの闇黒で不意に暴漢に襲はれた。曲者は物をも言はずに闇から躍り出て、穿いてた下駄を脱ぐと等しく、それを振上げて突然村長の面を殴つた。村長は眉間を破られて、血がタラ〜と流れた。

「何をする。」

と、屹と曲者を見ようとする途端、第二撃は村長の鼻柱をイヤと云ふ程掠めて、村長はグラ〜と其處に倒れて、人事不省に陥つて了つた。嗣は流れて地に漂うた。曲者は其儘姿を晦ましたのである。あゝ正義の犠牲！村役場と村民側と、村長と戸主との意志の疏通を圖る機關の欠て居る、多くの町村の有様では、誤解は免れぬ數である。誤解の結果は斯る尊と犠牲の血を流さなければ止まないものである。程へて我に返つた村長は、袂からハンカチーフを取出して、滴る血潮を拭ひ乍ら、苦痛を忍んで、徐かに家路を辿るのであつた。

三 競賣の入札

愈々競賣が始まつた。清水警察署は駐在巡査の應援として警部補に引率された十數名の巡査を明星村に派遣した。清水市や其近郷近在から入込んだ入札人たちは、午前九時に役場に集ま

つて、

二一八

役場員の案内で競賣に附せらるゝ現物——土地や建物や色々の動産の實地見分に出掛けた。二十人計りの入札人が三人の役場員と十幾名の警官に伴はれて朝日から小川、春日、秋山、それから夕月と、村内を一巡する有様は實に物々しい光景であつた。
「泥棒ッ。」

罵る村民もあつた。

「野郎、落札しやがる奴は生かしちや歸さねえぞ。」
と、敦圍く人もあつた。

一行の行動を氣支はしげに蹠いて來る村民が始めは二人三人であつたが、終には三十人も五十人も、凄い文句を絶えず口にしながら、送り狼の様にゾロ／＼と入札人一行の後ろに蹠いて歩いた。

「入札しやがつて見る、唯は置かねえから。」
「村の衆の血の涙も知らねえで、よくも入札なんか來やがつた。」

などと、口々に罵る聲は益々高くなつて來る。警官も始めの内は一々制

して見たが終には黙つて了つた。

一日の巡回を終つて、入札人たちが役場に歸つて來たときには、役場の門前に集まつて居る村民が百人以上もあつた。ワーワツと云ふ関の聲が、折から暮れ掛かる宵の空に響いて、玄關に吊された洋燈も揺れさうな勢であつた。

入札は午後七時で、八時開札と云ふ事になつて居た。

ヒユツと石が一つ何處からか飛んで來て、ガチャリと玄關の洋燈に當つた。けた／＼ましい響を立て、床に落ちると、油壺が破れて撒けた石油にバツと火が移つて、受付の机が一面の焰に包まれた。役場員と警官が飛んで來て消さうとするが消す物が無いのでウロ／＼して居ると、一人が消火器を持つて來る、小使が鍬で玄關前の土を浚つてブツ掛ける。警官が例の机の片脚を持つて戸外に挑り出すと、火の圍の様な机はコロ／＼と轉げて、門近く居る人民の方へ來る。人民はワーツと関を作る。火は僅かに消し止められたが、跡は黒闇々、此時持つて來て玄關の前へ立てられた高張提灯

は、丁度戦場の様な凄さを興へて、春の夜の風は冬の様に寒いのである。

「さアもう七時になりませすよ。入札をしますから、入札する方は集まつて下ろす。」

と、玄關で高らかに書記は呼ばはつたが、二十人許りの入札人は何處へ行つたか、影も見せない。

「さア始めませすよ。入札を始めませすよ。入札したい方は早く来て下さい。」書記は再び大きな聲で呼んで見たが、先程から玄關前の警官たちの中に

小さくなつて居た一人の洋服男の外には、出て来るものもないのである。「さアもう入札者はありませんか。無ければ入札を始めませすが……」

けれども矢張り出て来る者は無かつた。「ぢや貴下お入れなすつて下さい。」

と、書記は卓子の下に入札函を置いて、先程の洋服男を振返つた。洋服男は手帳を出して入札用紙に寫して居たが、それを疊んで、やがて入札函に投げ入れた。

「面の皮の厚い男だ。平氣な顔をして入れて居やアがる。」

と、門前の群衆が叫んだ。「もう入れる方はありませんか。入札を成さる方はありませんか。」

と、役場の書記が群衆の方へ向ひて言つた。時間は刻々に移つて行つた。門前の群衆はジリ／＼と門内に侵入して行く。すると警官が二三人ガチャリとサアベルを響かせて、

「入つちや不可ん、門内へ入つちや不可ん。」

と、門の處へ出て来て人民を逐ひ退けた。「もう時間が來ませすが、入逐する人はありませんか。」

と、役場の書記がモ一度叫んだ、門前の群衆は頻りに動搖めいた。「時間が來ませしたから、それでは開札します。」

と、書記は立上つた。警官も、先程の入札人も其方へ駆け寄つた。門前の群衆は関を作つて、一時に雪崩の如く門内へ闖入した。

「入つちや不可ん、不可んと言ふのに。」

と、云ふ警官の必死の叫びも、関の聲に葬られて人民は早くも役場の庭の半分を占領して了つた。

書記はブル／＼と其手を顫はしながら、態どガチャ／＼音をさせて、入札函の錠前を開いた。中には入札書が唯だ一通しか無いのである。

四 圖らず獨占の大儲け

書記は入札書を取つて読み上げた。

「一萬二百五十圓、帝國信託株式會社明星支店。」

門内の群衆はワツと聲を揚げた。書記は一旦引込んだが又玄關へ現はれて、

「他に札がありませんから、それでは信託會社に落札に成りました。」

と、宣言した。群衆は更にワツと関の聲を揚げて、石の雨がバラ／＼と玄關に降つた。書記も入札した洋服男も戸の陰に隠れた。警官は一生懸命に「亂暴すると許さんぞ。」

と、怒鳴つた。

玄關の提灯は何時か仕舞はれて、書記も會社の男も姿を隠して了ふと、後には闇ばかり残つて、赤筋入の警察の提灯がソロリ／＼と右左に動いて居るだけである。群衆は攻撃の的を失つて、

「馬鹿／＼しい、何の事だ、歸らうぢや無いか。」

「會社の奴、何時の間にか姿を隠して了やアがつて、卑怯な野郎だ。」

口々に此んな事を言つて、一人去り二人去り、遂にはさしもの人數も闇に掻き消す幽霊の如くに、見えなくなつて了つた。

それから小半時間もすると、信託會社の事務員と役場員とは、多數の警官に送られて、各々家路に就くのであつた。一人の若い巡查は會社の事務員に向つて、路々頻りに話し掛けて居る。

「今日の入札は獨占たア君うまくやつたね。」

「え、私もそんな事とは夢にも思ひませんで、何せ地所が大分あるし、近頃の買ひ物ですから、入札人同志で大分えらい競争がある事と思つたんで

すよ。處が案外で……」

「然さ、一時は非常な人民の殺氣だから、僕等なんぞも職務上どんな手段を取らなきやならんかと、實は心中甚だ危ぶんで居たんですよ。」

「それがですね、畢竟人民の示威運動が此方の爲には勿怪の幸と成つたんですからね。」

「すると人民に會社の方から餘程お禮をしても可い譯だね。はい、はい。」

「けれども随分怖い目をしましたから、差引私の方には儲け分は無いで、旨く言つてらア。一萬五千圓の税金に對して役場が差押へたんだもの、安く見積つても二萬や二萬五千の實價はあるに違ひ無い。それを一萬二百五十圓とは宛で貰つた様な譯さ。」

「はい、然でも無いですが、實際の處、一萬八千位は入れなくちやなるまいかと思つて來たんですよ。」

「君の會社やア地所なんぞ買つて如何する積りかね。」

「別に如何と云ふ事も無いでせうが、矢つ張小作に貸すのですさ。」

「役場ぢや豫算通りの一萬五千圓が入らずに四千七百五十圓と云ふ不足は如何するのだらう。」

「さアどうせ滞納で取れないと思つて締めるより外仕方が無いんでせう。」

「締める位ゐなら初めから締めて競賣なんて事しない方が可さそうなものだが……」

「これも規則なら仕方が無いんでせう。」

「けれど君、此結果は村を貧乏にして、今までの自作農を小作人にしてさ、村民からは怨みを買つて村治の圓滿を缺く様な事になつてさ、是れほど愚かな事は無いと僕は思ふんだが……」

「まアそんなものですな。」

何處からかピエーと石が飛んで來た。巡查も會社の男も首を縮めて、足を速め乍ら一段聲を低くした。

「で、君の會社では何でもやるんですな。地所も追々買ふんですか。」

「え、資本の餘裕がある限り、追々村の土地を買収する積りなんです。」

「村の土地全體を手に入れるとか云ふ噂があるが真かね。」

「出来ればするでせう。」

「然したらウンと小作料を上げる積りだらうね。」

「そんな事も無いでせうよ、幾何か高くするかも知れませんが、」

「いや恐ろしい形勢ぢや君の前ぢやこんな事も言はれんが、吾々の職務の方から見ると、警察事故は將來益々殖える計りだ。地主は土地を買占めて競争相手を無くして置いてウンと地代を上げる、さも無ければ地主側に都合のよい組合を設けて謂所トラストで同盟値上と来る。家主も然う、商人も然う、世の中が凡て此う云ふ風になつて来ると、勢ひ其反對に之に對抗する人も出て来る。要するに金銭上の争ひが絶えないから、色々な事故が発生して来るんで、ルーズヴェルトぢや無いが、トラスト征伐でもしない事にや。人民は愚か警察の人間の助かる時はありやせんよ。」

と、語る巡査は甚だ真面目であつた。連の男は巡査にむかひ。「大變悲觀して居らつしやるんですな。」

五 土地兼併の弊害

巡査は尙熱心に土地兼併の弊害を説いて止ないのである。

「いや君實際だよ、我が同盟國の英國などの話を聞くに、何でも土地が次第に兼併されて、大地主が各地に割據する様になつたために、その半面には土地を失つて小作人の境遇に陥入る農民が益々多くなり、常に地主側と小作人との間が圓滿に行かず、種々の繋争が絶えることがない。何程、無學無智な、忍耐強い農民でも、勘定に引合ぬ仕事がいづまでも出来る筈もなく日に月に生活に困る處から、心ならずも血氣の者は都會へ〜と出稼をする様になり、結局村に残る者は老人と女子供と云ふ風で勢ひ農村には勞働者が減少して、村方は寂れるのみである。又地主側に於ても、澤山の土地を兼併はしたものの、肝腎の耕作者が無くなる途に昨日の肥田沃圃も今日は草茫々たる荒地に化すると云ふ始末、近頃英國の農村の疲弊は實に悲惨なものであるそうな。それで官民ともに互ひに協力して銳意その救済と改

善策に苦心して居ると云ふことじや。」

「併し君、それは他人の疝氣を氣に病むと云ふもので、一體個人主義の盛な外國のことであるから、ソナなことも起るであらうが、我國の如きは天照大神の昔から一國一家の國柄であつて、てんで外國等とは國體が違ふのですからね、まわ永劫そんな心配は御座いますまいよ。」

「いや君、ところが我國でもチヨコく、そういう現象が見えるのだから實に寒心に堪へないのさ。君も新聞で見て居るではあらうか、先頃其筋の人が云ふのを聞くに、地主と小作人との折合が圓滿に行かず、遂に數十百町歩の良田美圃が荒蕪地となつて居る處があると云ふ事だ。それは奈良縣宇多郡の村の名は忘れたが、何でも郡長の直話だから確かなものだが、その村を始めとし宮城縣木越村、富山縣では幾所も、それから静岡縣三川村、近い東京附近では、埼玉縣川越在の古谷村等にある、殊に滑稽なのは神風の吹と云ふ伊勢國白石町在で、村民に耕作者を得難い處から、出獄人の團隊を監督人附で使用して僅かに耕作をさして居る様な酷ひ處もあると云ふ

からね。」

「なる程そいつお驚いた。既に我國にもそういふ問題が起て居るすかなあ。」と、連れの男は如何にも慷慨に堪ぬ様な風であつた。

「だからねえ君、無論僕は猫の額い程も土地は持たない云はレコンマ以下の貧民である。御覽の通り勿驚月俸大枚十五圓を頂戴する巡查で親子五人と母親が一人ノて六人の家族を、娘と女房の僅かな内職賃を足してそれでドウやら足らぬ乍らも露命を繼ひで居るのさ。元より地主に恩怨のある筈もなく、況や武士は食はねど高楊子で、自分が無資産のコンマ以下の國民であるからとて、敢て僻みを起して言ふ譯でもないのさ。併しながら實際今日農村の現状と彼等多數農民の悲惨なる生活状態を見ると、今日のまゝに放任して何の救済策も講せず居たならば、將來農村の頽廢はドレ程酷い事になるか知れない。殊に農村は國家の基礎で、又生命である、全國一萬九百有餘の農村の興廢は、國力の盛衰に大關係があるからね。だから僕は假令自分がコンマ以下の者であるとしても、忠良なる國民の一人と云ふ立

場から考ふると、この農村を亡ぼす處の、土地兼併の弊害と云ふことが衷情より寒心に堪ぬと云ふのさ、君は僕が徒らに悲観して居ると思ふかね。」

『いや、實際御高説の通りですな、全く地方農村が疲弊しましては、都會と云ふ文明の花は咲きましますまい。國民の多數を占る農民の購買力が減少すればする程、都會は不景氣になるのは當然で、現に僅か一年或る作物が不作でさへも直ぐに都會の商工業者に大きなその影響を及ぼす、早い話が百姓衆が貧乏しては我々商工業に従事する者も飯の喰ひ上げと云ふものです。畢竟去年の暮に秋山區の太藏老人が首を縊れて焼死んだのも、いはゞ國の寶である處の、忠良なる陛下の農民を社會が見殺にしたと云ふものですか。』

『そうです、其處が御互に考へなければならぬ最も大切な處です。』

二人はそれきりで話を中止、外套の襟に顔を埋めて黙つて歩みを續けた。

六 派手な友禪の羽織

十二圓八十五錢と云ふ負擔は、貧乏で病人を抱へた岡本の家にとつては莫大な金高であつた。家内中の有りど有らゆる家財道具から夜具、鍋釜の類まで、封印を付けられて了つたので、父は如何しようか途方に暮れた。母は身も世もあられす泣き悲しんだ。嘉十はフラーリと其邊を歩き廻つて、

『泥棒だ、泥棒だ、斷わりも無く、人の家の物を持つて行かうとしやがつて。』

と、朝から晩まで饒舌つてゐた。

父はフトお峰の事を思ひ出して、賣新亭に行つて立換を頼んだら、融通を付けて貰へるかも知れぬと考へた。それで夕飯を食つてから、進まぬ足を引ずつて朝日へ行つて、お峰に逢つた。お峰は此時丁度何處かへ買物に行つたと云ふので、父は帳場の傍の暗い隅で暫らく待つてゐると、外から賑やかな男と女の笑ひ聲がして、聽てそれが此家の暖簾を潜つた。見ればその女はお峰であつたが、その聲から様子から、僅かの間に其變り様！父

は思はず其目を睜つたのである。

平生から澤山の黒い毛ではあつたが、それをフツクリと大きな桃割れに結つて、金色の赤の美しい花の花簪を右に挿して、稍や垂れ下つた鬢が、ふくらかな、そして色の白い頬から耳の上の方を隠してゐる。黒の地に赤と白との目の覚める様な型を置いた唐草模様、毛織子の襟を掛けてそれに派手な友禪メリンスの羽織、朱塗の壘付の下駄を脱いで、眞白な足袋が夜目にもチラと光ると、得も言はれぬ美しい匂ひがフツと漂よつて来る。「内儀さん、唯今。」

一寸挨拶して、
「何ですよう、そんなに酔拂つて。厭な人ねえ、早く來つしやいな。そんなに酔つてらしつちや妾厭よ。」

男はお峰のお客と見えて、
「何でえ、貴様が飲まして置きやアがつて、ふゝゝゝ、けれども可愛いゝわい、うゐゝゝ」

よたゝととお峰の方によろけ掛かるのを、お峰は手を出して捉まへて、
「人が聞いているわ、好かない人。」

「好かんでも宜しい。なアお峰妨。」
酔漢はシツカリお峰の首玉にかじり付いて、其儘奥の方へ行つて了つた

闇黒の隅の方で見て居たお峰の父は、此時
「内儀さん、誠に邪魔しましたいが、私や是れで歸りますだ。」

ツイと立上つた。
「峰ちゃんに用がれ有んなさると云つてお出でたのぢやありませんか。今歸つて來ましたのに。」

「私やモウ逢はないで宜しいで御座ります。」
「おや可笑しいんですねえ。何故ですえ。」

父はハラ／＼と涙を落した。
「私彼奴の面ア見たら胸が一杯になりましただ。彼の態ア何で……」

内儀は驚いて、

「まア可いぢやありませんか。お客扱ひにや商賣柄あアしなくちやならぬいでせう。まア遊んで入つしやいよ。其内には峰ちゃんも手が明きますから。」

「いゝや歸りませう。あの様子を見ると、私や胸糞が悪くなりませうだから。然で御座いますか……」

内儀はお峰を取返されはせぬかど云ふ恐れから、父の心を如何にもして維ぎ留めようとするのである。

「ぢや何で御座いますか、是は峰ちゃんがお客様から祝儀に戴いたのが、峰ちゃんから折があつたらお父様のお小遣にお届けしたいと云つてたのですから。」

内儀は帳場の抽出から五圓紙幣三枚を出して、父の手に握らせた。「然ですか……」

もぢくする父を壓へ付ける様に、内儀は、

「峰ちゃんも眞に仕合なんですよ。彼の若さで、能く神妙に女中奉公なんかすると云つて、孝行娘と云ふので、どのお客様も大變な御最負なんですよ。それで祝儀なんか月に積ると二十四五圓つもあるんですから、これからはモウお父様のお小遣位には不自由はさせないと申して居なさんで。あなた、とても一通りの他の稼ぎぢや、こんな事はあるもんぢや御座いませんよ。十四や十五の女の子の腕ですものね。」

父の涙に曇つた目は次第に晴れて來た。

「どうも色々御心配を掛けて濟みませんが、之はお貰ひ申して置きます。」

「何ね、妾が上げるんぢや無しね。全く峰ちゃんのお働きの御座んせんですから。」

「それもこれも内儀さんのお蔭で……お禮の申し様も御座んせんです。」

「おや峰ちゃんはまだ手が明かないかしら、一寸妾見て参りますから、少しお待ちなすつて下さいまし。」

父は嬉しいのか悲しいのか自分でも解らぬ心を抱いて賣新亭を出た。戸外はヒュー〜と吹き捲くる北風の寒さに、思はずブル〜と顫ひするのであつた。

岡本の家では此うして競賣を免れたのである。

農村凋落の傾向 現時農業の趨勢は、中農は減じ大地主と小作農が増加する傾向である。或専門家が全國十八箇所に於る自作農に就て調査せる所に據るに、明治二十三年に於る収入總額を各百とせば収入は三十二年に於て百五十四、支出百五十五、四十二年に於て収入二百〇七、支出二百十八を示し、支出の増加は収入に比し遙に多いなるを見る。顧に近時文明の餘澤農村に及び農家の生活程度大に向上、亦稼業經營の膨脹と公租負擔増加の爲ならん。尙農家經濟の現狀を見に、其耕作反別は平均一月當り一町歩内外に過ぎず、農家の收支相償ふこと能ざる自然の數也。頃日農商務省の調査發表せる全國農家の負擔額無量九億五千萬圓に達し、自作農は一月平均二百五十圓、自作兼小作農は百九十圓の負債を有する計算なり、而も此負債の多くは一割乃至一割五分の高利に歸ると。そして毎年農家九百月に對し三月の破産廢家を出す云ふ。豈恐る可現象ならずや。

第八章

一 郡視學と教員

不意に明星尋常高等小學校へ郡視學が出張した。

正午前の三時間目の授業が始まつて居る處へ到着した郡視學は、インパ

ノスを着たまゝ案内も乞はずにツカ〜と職員室へ入つて行つたが、校長

は居すに、年若な准教員が一人丁度お清書を直して居る所であつた。准教

員は視學の顔を見ると、椅子から跳ね返る様に其場に起立して、恭しく敬

禮をした。視學は帽子を取つて片手に持ち乍ら校長の机の側へ進むので、

准教員は恐る〜首席訓導の椅子を取つて薦めるのである。視學は帽子を

校長の机の前の本箱の上に置いて、インパノスを脱ぎ乍ら

「校長は何處へ行つたえ。」

と、押柄な調子で聞く。「は、唯今御授業中で御座います。」

准教員は慇懃に此う答へた。

「何の授業だ。」

「尋常四年の修身で御座います。」

「君の級か。」

「は。」

視學は黙つて敷島に火を點けた。准教員は立つたり居たりして居たが、

聴てフイと職員室を出て、校長の授業をして居る教室へと趣いた。

「先生、郡視學がお出でになりました。」

と、小さな聲をすると、校長は机の上の教科書に注いで居た目を一寸准教員の方に外らして、

「ぢや君濟まないが、お茶を一つ上げる様にして置いて下さい。それから何か菓子を取つて来る様に小使に然言つて。」

「先生御都合に依つたら私が代つて授業をしませう。」

「いや少し話がしかけになつて居ますから、モ少しすると参りますと視學

に申して下さい。」

「左様ですか。」

准教員が上草履をバタ付かせて、廊下を飛んで來ると。

「君、一寸、君。」

と、云ふ聲が、とある教室の窓から聞こえた。立止まつて振り返つて見ると、

それは首席の山梨訓導であつた。山梨は教壇を下りて來て、窓から首を差

出し乍ら、

「何だね望月君。」

と、訝かしそふな顔をする。

「あの、郡視學が來たんです。」

「郡視學が？」

山梨の顔はニヤリと笑つた。

「え。」

と、云つて、望月准訓導がスタ〜行き過ぎると、山梨は再び教壇に歸つ

て、生徒の方へ向つて大きな聲で、

「では今の處を始めから雜記帳へ書いてお出しなさい。出来たら當番が集めるんです。級長はよく騒がない様に世話を焼いて、鐘が鳴つたら出して宜しう。」

此う言つて置いて、さつさと職員室へやつて来た。

山梨が職員室へ入つて来た時、准教員は郡視學の前に立つて、何か言つて居る處であつた。視學はお茶を啜り乍ら、不興げに、

「ぢや未だ来んど云つて居たんだね。」

「はい、いえ、直ぐ参りますすけれども、話がしかけになつて居るんで、其の終り次第……」

「ふーん。」

郡視學は忌々しそりに敷島の吸ひ殻を火鉢の灰の中へギユウと突込んだ。山梨は満面に笑を湛へて、視學の傍へ寄つて来た。

「これは視學さん、ようこそお出でになりました。其後は御無沙汰致しま

した。何時もお變り御座いませんで……どうも何時までもお寒い事で御座います。その後奥様も御嬢様も御機嫌克く、坊ちゃんも近頃ズツと御達者で入つしやいますか。」

と、馬鹿丁寧にあやまつた。視學もツと椅子を立つて、

「や、山梨さん、先達ては如何も恐縮したです。彼の様な御心配に預かつては實に濟まんぞ、家内なども宜しく申してくれと言つとりました。お蔭で小僧も引續いて丈夫になりました。」

「それは何より結構の事で御座います。今日は何か……」

「例のでね。」

ニヤリと視學は笑つて見せた。

「さア、貴下の御光來を知つて居られて、それで一向顔も見せんと云ふのは餘り失禮では無からうかと思ひますんで。」

「なに君、視學なんぞよりは兒童の方が大切だらうぢや無いか。」

視學は破顔一笑、怪しげな表情を見せるのである。

「はゝゝゝ、然仰言れば大きに然うで、私などは差向き教員として不熱心極まる不適任かも知れませんかよ。」

「不適任とも……君などは訓導としては最も不適任さ。併し何か別に適任があらうからね。はゝゝ、いや小林校長は高山式のえらい處があるよ。」

「高山式とは？」

「樗牛が言つたらうぢや無いか、吾人は須らく現代を超越せざる可らずッて。」

「すると先生の非現代的の處が。」

「そうさ、曲折の多い世間と云ふものを解せず、頗る單純な處は、如何しても高山式だよ。」

「高山先生も地下に泣きますよ。はゝゝゝ。」

「はゝゝゝ。」

二人が人も無げな高笑ひに、准教員等は此方の自分の席で、直し物をし

ながら、先程から齒を切つて居るのである。

「望月君。」

山梨訓導は椅子を離れて准教員の机の方に来ながら、ポケットから墓口を取出して、

「望月君、君済みませんがね、小使が居らん様ですが、一つ岡屋まで行って下さいませんか。」

准教員は不性々ゝに立上つた。

「はア。」

「視學さんに上げるんですがねえ、上等の鮮を一人前急いで持つて来る様につて。」

「はア。」

准教員は不平そうな顔して出て行つた。

「山梨さん、介意つて下さらん様に願ひますよ。」

視學は山梨を小手招くのである。

二 突然轉任の辭令が下つた

午後の授業が始まつた。

郡視學は校長に案内させて、各教室を巡視するのである。山梨訓導は尋常六年の兒童に國語の綴り方を教へようとして、修述の練習をやつて居ると、其處に視學が大きな髭面を抱へて、黒い表紙の手帳を持つて、校長の先導で入つて來た。

生徒は一齊に居すまひを直した。山梨は恐ろしく眞面目な様子を作つて生徒に向つて、

「郡視學さんがお出でになりました。御挨拶を致しませう。」

と、教壇を下りて、視學の方へ向直つた。同時に級長が

「禮。」

と、號令を掛けた。子供は一度に立上つて、恭しくお辭儀をするのであつた。郡視學は満足げな笑を浮べて軽く會釋をした。

視學は五分ばかり授業を見て、教室を出た。出がけに山梨の方を振返つて、

「山梨さん、これで失敬しますから。」

と、言つた。山梨は入口の方へ飛んで來ながら、

「もうお歸りで御座いますか。」

と、生徒も何も捨て置いて其儘視學の後に蹤いて教員室へ來た。

校長は恭しく椅子を進めて、

「何卒お氣付の處を仰言つて戴きたら御座います。」

「授業の批評ですか。」

「は。」

「授業の批評は今日はいしませない。兎に角よく事務だけは整理して置いて下。」

「は。」

視學はグツと茶を飲み干して椅子を離れた。先刻から後ろに立つて居た

山梨訓導は、急いで視學の帽子を取つて渡しながら、インバネスを背後から掛けるやら、靴まで揃へてやつた。

これを見て他の職員は何れも顔を顰めた。

「失敬した。」

と、横柄に挨拶して玄關の方へ歩いて行く視學を校長と山梨とは門まで見送つて、歸ると、

「先生、甚だ濟みませんがねえ、今しがた家から病人が出来たから直ぐ歸る様について人が来たですが、私お暇を戴きたいですが、如何でせう。」
と山梨は言ひ出した。

「それはお氣毒でなす。病人ぢや直ぐお歸りになつたら可いでせう。」

「然ですか、どうも誠に濟まないですが、では何分願ひます。終の時間は習字をさせて置いて下されば、打捨つといて可いですから。」

「承知しました。お大事に。」

山梨は仕度もそこへに學校を出たが、家に病人とは眞な虚で、其足

で岡屋へ行つて、豫て視學と打合せてあつたものか、二日は人氣交へず、夜までも酒を酌み換はしたのであつた。

是から一週日の後、小林校長は突然隣村なる花澤尋常高等小學校長に轉任の辭令が下り、之と同時に明星小學校の首席訓導であつた山梨貞吉は、明星尋常高等小學校の訓導兼校長に任せられた。此辭令の到達した時、明星小學校の教員たちは目を睜つた。殊に望月准訓導は、

「畜生ッ。」

と、叫んだが、彼は間も無く外の學校へ轉任の運動をしはじめた。

明星村青年會の幹事鈴木菅太郎は、此際如何しても山梨を敵るより外手段が無いと主張した。けれども温厚な他の幹事や草村會長に宥められて、心ならずも唸る腕を撫つて僅かに我慢して居た。

常には温厚を以て許されて居た學校の教員達も、今度の事はよくく腹に据ゑ兼ねたと見えて、此辭令の到達した翌日、一同は打揃つて山梨に此出來事の顛末の説明を求めた。山梨は自分の關する所でも豫期して居た處

でも無く、實に思ひも掛けぬ意外の出来事であるとシラを切つたが、そんなら潔白を表明する爲めに此際校長の辭表を出せと迫られて、之を拒絶した爲め、茲に端なく職員との大衝突を惹起したのであるが、その結果は硬骨なる幾人の轉任に依つて、間も無く其儘氣壓も鎮壓され了つたのであつた。

田園趣味 人は皆これ土の子なり、土を離れて發展すべからず、人の生活に一日も缺く可からざる「衣食住」の總ての物質は、皆其素を土の恩恵に仰ぐものなることを記憶せよ。
昔、羅馬の盛なるや、其大將は田園の裡より起り、田園の裡に返れり、而も一度衰ふるや、彼等は皆純然たる都人士と化して、田園に耕すものは只奴隸のみなりき。由來古き事實は新らしき眞理として繰返さる。國の多數が米の實る木を忘却するが如きことあらば、それは實に國運の發展を阻止する所以の素なるのみ。故に人は皆其境遇、職業の許す範圍内に於て、土を愛し善用して趣味生活の發展に資すべく、常に田園を研究して田園生活を獎勵せざる可らず。
則ち天下有識の士が、よく田園の趣味を解し、田園の人と親しみ、田園人を指導して、田園の繁昌策を講ずるに非ざれば、國運の發展遂に望む可らざる也。
(箕雪)

第九章

一 耕地整理の紛紜

村人の血の涙同様な競賣處分で得た金も、數年來、村が農工銀行や個人などから借入れた元金や利子を償却すると、残りは何も無い事になつた。此残り少々の金で、役場は學校の増築やら經常費の足し前やらをしなければならぬのである。

耕地整理は久しい前から此村の宿題になつて居たので、曩に其筋へ申請してあつた、其工事費二萬五千圓を農工銀行より借入れることが今度認可されたので、愈々着手することになつたのである。處が先にそれを承諾した地主の一部から俄かに異議を申出でた者がある。その理由は、整理の負擔に堪へぬと云ふのと、又一つは整理の結果當分は土地が荒れて收穫が少なくなるから、此不景氣續きの金融の悪い時に始められては困ると云ふのである。それから又他の一部が反對する理由は、耕地整理の効果を元より充

分に認めて賛成したのであるが、今度選ばれた委員の多くがドウも其人を得て居ない。それで事業の成功が疑われるので、兎に角此際は延期したいと云ふのである。

村役場では既に施行認可もあり、且又農工銀行よりの借入金まで出来た今日になつて、斯く反對運動が一部に始まつたので、其處置に當惑した。併し大和村長の意見としては、最初から今四五年先へ延期するのが、村民の利益であると言ふのであつたけれども、今の明星村は野心家共が勢力を占めて居るので、遂に無利やりに實施することになつたのである。殊に信託會社では、村民の購買力を増させるには如何しても此際耕地整理を實行させねばならぬと云ふ意氣込から、種々の苦肉策を廻らして、漸う四五日前から工事に取掛る事になつたのである。

愈々耕地整理が始まつたので、村の借金ではあるが、兎に角小三萬圓の金が一時村内へ散るので、何となく村内は人氣だつて來た。それを當てに田舎廻りの藝人どもも入込めば、又種々の店が開業された。内にも驚いた

のは新たに開業した料理店が三軒もあつたことで、何れも垢ぬけのした婀娜つぱいのを四五人宛置いて、村民の生血と財布とを絞らうとして居る。

近又樓、長瀧、愛竹樓、框の木、岡屋、賣新亭など、何れも負けず劣らず、名古屋種のオキアセ藝妓を四五人つゝは抱へぬのはなかつた。

耕地整理の事務所は近又樓の離れ座敷に置かれ、縣廳より出張した技手までがその家に下宿することになつたのである。心ある二三の村人は「事務所を料理店の離れに置くなんて間違つたことだ。西正寺か日宗寺に置いたら可さそうなもの」と云ふのであつたが、てんでそんなことは問題にはならなかつた。

整理が始まつてからと云ふものは、村の有力者だとか議員だとか肩書の付く連中は、殆んど此樓へ入浸りで、時に依ると晝間でも二階座敷で三味線や太鼓の音がすることは珍らしくなかつた。その他どこの樓でも、小さな飲食店にいたるまで、夜間になると底抜け騒ぎの大繁昌を極めた。

その頃村の評判となつたのは、羽柴奎右衛門と云ふ村内切つての財産家

の孫にあたる。與吉と云ふ少し甘い青年が、愛竹樓の蝶吉と云ふ不見轉藝妓に引掛かつて、兼て蝶吉の情夫である瓦屋の虎之助の種を押し付けらてお目出たくも蝶吉のお腹の仕末を申付けられた。それで、いつも鱒を二つ切りにして奉公人の總菜に喰はせると云ふ、客齋の羽柴家の親父がトウトウ三百圓取られたことであつた。

二 模範村の話

「今晚は……明日は耕地整理の工夫でやす。宜しく頼み申しやすよ。」
と、言つて来たのは組親の寺西龜吉である。

「御苦勞さんでやす。龜さん、一寸ね寄んなさいやア、少し話もあるで。」
主人の音右衛門は今風呂から上つた計りの濡れた身體を急いで拭いて、着物を引掛けた。龜吉は、

「御免なさいよ。」
敷居を跨いで、廣い土間の中の風呂釜に、トロリ〜木を舐める様に、

彼方が燃えたり此方が消えたりして居る火の前に屈んで、腰から煙草入を取つて一服吸付け乍ら、

「音さん、耕地整理も随分厄介なもんだのう。」

と、爐傍へズツと進んだ。音右衛門は帯を締め、横座にドツカリと座つて、

「まあれ上がんなすつちやア。」

「のうれ上んなさいやし。」

と、音右衛門の妻さんも来て薪を折燻べた。

「はア有難う御座んす。ぢア一服吸ひ付けて行かすか。」

藁草履を脱ぎ棄て、膝行上つて、

「音さん、耕地整理にも實に弱つて了ひやすにやア。」

音右衛門の妻さんの汲んで呉れる番茶に咽を濕ほし乍ら、

「私らア地所の方からは地所割に費用を取り立てられる、其の上に入足を
出させられるので。——そりやア日傭は出すだすらから可えようなもの、

こんな不景氣な歳に壓制半分だでのう。」

「さア、地所持ちも泣く、私等見た様な小作も泣く、兩泣かせの耕地整理と云ふものア、一體何の益に立つもんでやせう。」
と、無智な音右衛門は怪訝の眼を向けるのである。

「大きに然でやすよ。何でも他でもやるで、此村でもやらにやア、村の體面に係はるとか言ふ話でやすが、兎角世間が廣くなるど、碌な事ア無いだ。之で何でやせうか。些たア利益になる事でも有るだらかのう。」

「そうさ、役人衆の言ふにや、第一國の利益になると云ふだ。それに整理をやれば耕作反別が多くなるし、又今の様に水を田に溜て一作しきや收穫ないでは、日本の國の身上として、收れる物を收らないで置くだから、何でも二毛に出来る様に、冬は水を落とさなきやアならないと言ふでやすよ。今でやア昔とは違つて、毎年人間の數が五十萬人宛も殖えるので、日本で穫れるだけの米では年に二百萬石から不足ないで、何でも一年には外國米を二千萬兩も買はなきやアならないし、その他にも大麥、小麥、大豆、メ

リケン粉等買ふのも大した事だと云ふからのう。それが國中悉皆整理が出来た時にやア買はずと濟むと云ふからのう。」

「つまらねえ餘計の事を言つたもんだのう。整理をしたからつて直き其年から餘計に穫れると云ふものじやなし、うちにも俺ア村なんぞは土地の高低が甚いんだから、整理のためにやア肥土が皆な底へ埋り込んで了ふだ。八年や十年が間ア收穫が減るとも増すことばあるまい。それに近頃不景氣續きで金融の悪ひ時によ、澤山な借金などして始めるほどの仕事じやアないかと俺ア思ひますだ。」

「さア然う云ふ考へを持つて居る衆も少くは無い様だが、何せい村の先へ立つ人達の間に整理を仮託に何か謀畧があるらしいから、急がいでよい事を無理な真似して始める事になつたといも言ふが、それア人の噂だから、真だとも云へんがのう。」

「なアに噂じやあんめえよ、そう云ふ手本は世間にやア随分あるからのう。俺アこう思ふだ、てんで事務所を料理店に置くなんてえことが怪しいじや

アないか。見さつせえな整理の役人だとか議員だとか云ふ連中は、始終彼處へ入浸りてよ、酒ばか飲つて居やがる。俺ア日がら一日重い土畚を擔いで居るのに彼奴らア茶屋の女どもと戯遊て居やがる。全體彼奴等が飲食する費用は何處から出るだか怪しいもんだ。』
「音右衛門は其の頑丈なアバタ顔を火の様にして、キツト土間を睨んだ。『真だのう、そんな事思ふと、地所割を出すのも人足に出るのも厭になつて了ふのう。』」

「然でやすよ。此んな詰らない急がいでも濟む事に借金した大金を懸けるよりか、俺ん考ぢやア、共有山の處オ何とか早く片を付けて貰ひたいと思ふだが。』」

「共有山と言やア、久しいもんでやすのう。早い一年も経つに未だ處置ん付かないすらかのう。』」

「それがの、ソコにやア底があるもんだでの。』
世間の模村の話を聞くに、伊豆の稻取村にしる、美濃の蛭川村や落合

村にしる、隠岐の布施村にしる、大抵の村方は共有山の整理がよく出来てそれで村の人達が楽しく暮らして居ると云ふだに、羨ましいこんだ。』
と、二人は共に嘆息した。

三 共有山問題

龜吉は煙草をボンとはたいて、

「ね前さんちやア知んなさるまいが、御維新のゴタ／＼騒ぎに村の共有山も一時滅茶／＼になつて居ただね、それをソレ、朝日の平山さんと夕月の古橋さんと小川の和尚さんと、それから秋山の中畑さんに向後さん春日の中川さん、これだけの骨折で又村の手に還つただ。處が其時どうした理由か、地券が村の名にならないうで六人の名になつて了つた。尤も其時は五村別々の村だつたで、共有山も村々で別々の名にして置く積りだつた相だが、誰も六人の名にした事は知らなかつたや相な。』
「すると體よく六人に横領されてたと云ふもんでやすのう。』」

「それで六人の方ぢやア、此山は元々六人の物ぞ、村の共有山ぢや無いと云つてゐるだぞうだ。」

「太え野郎だ。」

と、音右衛門は又其赤い大きな顔を擡げた。

「何にしても肝腎の證據の地券が六人の名になつて居るで……それに平山さんは収入役でもあるし、憎まれると碌な事ア無えで、誰も表立つて顔張る人は無いもんだから、それで事もツイ長引くと云ふもんだのう。」

「それで裁判にもならないでやせうか。」

「畢竟然だのう。」

「すると山も六人に取られて了ふだかのう。」

「さア其處が難かしい處だて、見すく彼の大金になる山を、村の衆だつて打捨りたくも無いだ。それに學校を建てて、耕地整理だつて言つて、夥く金の要る時だてのう。それで又此頃やかましくなつて來たですに、何しろ六人の豪い衆相手だて、村の衆も骨が折れるだ。青年會で専ら力ア入

れてくれるで、それも出る様なもの、さも無きやア泣寝入する處だつたでやす。」

「して見りやア、有る物は取られる。無い物までも差押だ競賣だつて持つてかれて、村の衆は一日まじに立つ瀬が無くなるだ。」

音右衛門は頻りに憤慨した。

「然言へば其通りだのう。悪い世の中になつたもんだ。」

と、龜吉も太息を吐いた。

「此うして末は如何様になつて行くでやせう。村は。」

「村の衆は何にも無い様になつて、段々々々村が淋れて行くだの。太る。のは六人の衆と會社の懷中だけだんべえのう。」

は、と龜吉は淋しく口を開いて強いて笑つてゐる。

「私等ア何にも知らないだが、地面は一年増しに皆な無くして了ふだ。そうして其無くなつた地面は段々々友を呼んで一つ處へ集つて行く——村中の地所は五軒か十軒の物になつて了ふだ。そうして八百軒の村の衆は私等ん

様に小作になつて、其頃にやア太藏さん見た風に地獄へ行くだか、食ふや食はずになつて他村へ流れて行くだ、あゝえらい浮世になつたのう。」

音右衛門は目を瞑つて天井を打仰いだ。
「そりやれ前さんち見たいに、地所まで役場や會社に取られて了つた人いやア、世の中が尙更情けなく思へるに違ひ無いだ。私等にした處がこんな村に何時まで居るだかと思やア悲しくなるでな。」

龜吉は慰め顔に語るのである。
「不可えだ。不可えだ。私ア村を此儘にして置くことは出来ない。一人や二人の事ぢや無い。村の衆一統の迷惑になるだで、私や村會議員の衆に頼んで耕地整理も今四五年先まで延期す様にして貰ふだ。村長さんや役場の衆にそう言つて學校建てる事も延期して貰ふだ。共有山ア如何しても村の衆の物にしなくちやアならない。六人の奴等に頼んで承知しなけりや、私一人でも可いから裁判に願ふだ。」
屹然と目を刮いた音右衛門の顔には、物凄計りの決心の色が動いたの

である。龜吉は其眼の光に打たれたかの様に下を向いて、

「けれども音さん、一人や二人で出来る事だら、疾くの昔に處置が付いて居るだ。それが今になつても埒の明かねえと云ふなア　よくく難かしい譯合の事があるだよ。」

「いんにや龜さん、村の衆が生氣地が無えからだ。難かしい仕事に正面に當つてする氣にならねえからだ。なアに皆なの爲と思やア此身體一つ位ゐは投げ出して可いだ。」

「然言はれると、私等ア始め面目次第も無えだけんど……」
・ 爐の火は明々と燃え上つて二人の顔を照らした。先程から土間の隅で風呂の下をブー／＼吹いて居た妻さんは、長い火箸をキゴチなさそうに傳ひながら、

「如何ですら龜さん　れ湯は。」
音右衛門も向き直つて、
「遅くなつたに、一杯入つてれ出でなすつては？」

と、糊めた。

「はア、有難う御座んす。また此次に貰ふとしやせう。」

龜吉は番右衛門の家を出た。春の宵は星多く輝やいて、何處からとも無
く、櫻の花が一片肩の上に散つて来た。

四 耕地整理の中止

秋山區に於ても今度耕地整理が實施せられると云ふことは、秋山區民に
とつて實に寝耳に水の驚きであつた。それは一時無期延期と確定して居た
のを、二三の野心家が一般區民や地主達にも相談せず、秘密の内に事を
極めたからであつた。

そのため今日は區内正義派の有志達が西正寺に寄會ひをして居るの
である。

「時に皆さん、今度のやり方は實に亂暴と言はうか、壓制と言はうか、吾々
區民地主を馬鹿にした仕打ではありませんか、幾ら法律規則が許すからつ

て、その方法如何に依つては村全體の盛衰に係はる處の大問題を、一應の
相談もなく、僅か二三の人で勝手に取極なんて、聞けばモウ工事費二萬五
千圓の借入れも済み、又縣からは一昨日とか技手が出張したと云ふことじ
やありませんか、皆さんは何う思つて居らつしやるかもしれんが、最早一
刻一時も猶豫して居る時ではなからうと思ひます。我々正義派に屬する者
は至急調印を致しまして、直接縣廳へ出頭して知事公に面會を願ひ、整理
施行の延期を嘆願するのが急務であると思ふんですが、皆さん方の御考は
如何なるんでせう。」

と、福島錦太郎は熱心に述べた。すると、

「私も福島君と同感です。吾々は到底こんな無法專斷壓制な仕打を黙して
居ることは出来ません。吾々秋山區民が反對運動を始めたならば、必ず他
區の同感の人達も賛成するであらうと思ひますから。」

と、賛成したのは拓植翠吉であつた。多數の人達は感程と此説に稍賛成の
様子であつた。

「私は運動も嘆願も其の時期を後たと思ふでがす。已に農工銀行からの借入金も認可となり、且又技手までが御出張になつた今日に至つて、一部のものが如何に陳上書を提出して嘆願した處で、知事公が恐らく受付けにならないからうと思ふ。法律上から考へても以前の規則とは違つて、今度改正になつた處の耕地整理法の第〇條に依ると、施行區域の地主三分の二の調印を得れば、たゞひ三分の一の地主が反對であるとしても、整理の遂行が出来ることになつて居るし、又その工事費の如きも強制執行に依つて徴收し得ることにもなつて居るから、私は今更ら騒いで貴重なる時間と金錢を費やすよりも、他に何とか好い方法がありはしますまいかと考へるでがすが。」

と、老功なる意見を述べたのは、以前戸長を永年勤めたことのある福島善藏と云ふ老人である。すると。

「いや私と雖も徒らに事を好む譯ではありませんが、御互に村一般の利害を思ふからです。今も福島老人が申される通り、他に宜い名案が御座いますれば伺いたいものです、何うか皆さん此際御遠慮なく御意見があつたなら……」

それからそれとなか／＼評議は盡きなかつたが、最後に或る老人の提案に依つて、愈々工事を開始するに就ては範を近くに在る日出村に採つて、一つの『規約』を定める事を、村役場と整理事務所とへ建議することに決したのであつた。

流石は有名なる模範村だけあつて、日出村の整理の遣り方は實に行届いたもので、何でも有名な東京の石井洋と云ふ、報徳教の先生の考へたものだそうだが、石井先生の説では耕地整理と言ふことは是非とも遣らなきやならない大切な事ではあるが、その實行方法を誤まると却つて村の衰亡を招く原因となるから、整理を遣るには其時期と尙其工事費が何ういふ風に費消されるか、先の先まで調べて掛らねばならぬと云ふのであるそうな。それで整理を遣つた後は、少くとも四五年間は收穫は減じるものと思はねばならぬ、併し土地に依つては減せぬとしても、一時に何萬と云ふ大金

が費えることだし、假令其金は村内へ散るとしても、工事に出て日當を得る農民達はその貸銀を徒らに費やす様なことがあると、約りは村を枯すことになると、それを心配したものである。

「俺ア夫を寫して置たいから、誰か讀で見つせ。實に行届いたものだよ。」

と、一人の質村そうな老人が言ふのを受取つて、

「評判にやア聞いて居たが、そんなに行届いたものかなア。」

と、福島老人は懐中から毀れ掛つた眼鏡を取り出し、手拭の端で玉の塵をぬぐつて掛けてやをら讀み始めた。

耕地整理實施に付き規約

一、今回耕地整理を實施するに就ては、將來耕作上の便利は云ふまでも無く、旱魃、入水等の愁ひを免るゝのみならず、併せて收穫の増すは確實なり。されども此處四五年間は收穫の減少することを豫期せざるべからざるが故に、地主小前に限らず、各自の家政生活上に就て其心

掛肝要の事

- 二、耕地整理を實行するため、借入金其他に於て約五萬餘圓の工事費を要し、自然其金は村内一般へ落るにしても、貸銀を得る各自が之を徒らに浪費せず貯蓄する様に心掛く可き事。
 - 三、村内諸商店は村民の義務として殊更ら贅澤品を輸入し又は販賣せぬ様、又挑發的賣出しなどを致さざる事。
 - 四、村内料理店及飯食店は、現在開業の者より外新規開業を許さず、又現に開業し居る者といへども、凡て男女雇人は現在の人數より以上の者を新に雇入るゝことを致さざる事。
 - 五、凡て耕地整理に従事したる人々への勘定支拂は十日目毎とし、其際支拂賃銀の三分の一は必ず三ヶ年の据置貯金とする事。
- 但し右貯金の方法は、産業組合より、各自銘々の通帳を受取り置き、其都度預ケ入をなし、通帳は村長に於て之を保管するものとす。
- 右の通り規約村内一同協議の上堅く實行する者也。

二六八
 日出村々民一同
 日出村耕地整理事務所
 日出村役場

秋山區の名を以て、此を模範として『規約』を作りたいたと、村役場と整理事務所とへ建議したのであつたが、遂に實行されるに至らなかつた。秋山區民三百有餘名が明星村將來の爲めを思ひ、奔走盡瘁したる効もなく、あはれ野心家共の爲めに一朝にして埋むり去られた事は残念と云ふも愚かの次第であつた。

此の耕地整理の工事を開始するに至つた動機を調べて見るに、元々村の爲とか整理の効果を認めてのことではなく、始めから一部野心家共と彼の信託會社とが結託しての儲づくの心事であるから、工事の中期に至り、利益分配のことから彼等の間に争ひが生じ、延いて此工事に幾多の不正のあることを發見されたので、遂に縣知事より工事中止を命せらるゝに立至つた。

第十章

一 學校併合問題が湧き出した

山梨貞吉が明星尋常高等小學校の校長になつてから、間もなく村内に學校併合問題が湧き出した。湧き出したと云ふよりも再燃したので、一箇村に二箇の小學校——朝日に在る明星尋常高等小學校と春日の春日尋常小學校と、此の二つを置くのは貧乏村の經濟に取つて少々贅澤であるから、之を合併して一箇所に建てれば、第一に校具費や設備費が半減するし、教員の俸給から言つても餘程の節約になる。それも通學の出來ぬ程の遠距離では如何する事も出來ぬが、村の中央に置けば、最遠距離が一里位であるから、通學が出來ないといふ遠さでは無い、と云ふのである。

合併に一番熱心なのは小川區であつた。小川は明星村の中央なので、合併の曉には、學校の位置は是非此處にならねばならぬのであるから、此處では區長を始めとして區民一同最も熱心に數年來合併を主張して來たので

ある。けれども朝日と春日は、現に學校の在る所だけに、移轉合併には絶對に反對で、夕月と秋山の一部は、合併すれば通學の距離が遠くなる云ふ理由から、矢張り合併に反對して居た。それで區民が必死の運動も今迄は何の甲斐もなく蹂躪られて、小川區七百五十の人口は無念の切齒をして居たのである。

夕月の區長古橋謙三と山梨校長とは先刻から學校の應接室で此事に就いて頻りに談話をして居る。古橋は角刈にした頭髪の手を、右の手で後ろに梳いて、

「山梨君、いや校長さんと是から申上げよう。はい、ねえ校長先生、御新任の御披露として、君大に力を奮つて其手腕を見せてくださいなぐちや困るぢや無いか。さも無けりやア僕等の推薦甲斐が無いと云ふものだ。」

山梨は今度俄かに仕立てたチヨビ髭を手で觸つて見て、
「僕が今度此椅子を占める事が出来たのは、畢竟君等の御盡力の結果だから、仇や愚には思つて居らんのだ。けれども僕の考へにやア如何も君等の

言ふ様に形勢が切迫してるとは思はれぬ。小川の奴等が如何に運動しても、それは烏合の衆の盲動と云ふもんで、格別氣に留めるにや及ぶまいと思ふのだ。」

「併し僕には如何しても合點の行かない事があるんだがね。それは此合併問題と云ふものは、既う數年前に解決を告げて居るので、小川の者も今の朝日の學校を建ててる時に、チャンと承知して居る筈なんだ。それが今頃になつて突然又問題になると云ふのが、實以て怪しからん。それに今度の小川の態度と云つたら宛で言語同斷で、合併が成功しなければ村税を納めないなんて突拍子も無い事を言ひ出して、馬鹿に強硬なんだから驚く。山梨君、校長としての初陣だ、一つ小川の野郎共を屈伏させて呉れ給へ。」
「さア、小川の今度の態度は僕にも一寸解り兼ねるが、君、一村の經濟の上から公平に見たら、小川の言ふ處が却つて至當かも知れないせ。」
「と、と、飛んでも無い事を。君も苟くも夕月の住民ぢや無いか。夕月の利害を第一に考へて呉れなければ困る。」

「左様、夕月の住民であると共に、僕は明星村の住民だからね。」

「然ぢや無い。そう誤解して貰つては困る。僕は元より絶対に合併反対論者さ。けれども理論から言ふと今言つた通りの事になると言ふのさ。」

「そんな事は如何でも可い。僕等ア人の便利を考へてやる様な餘裕は無い自分たちの都合さへ好けりやアそれで可いのだから。」

「君も随分露骨だね。」
「然さ、其方が手ツ取早くつて可いやね。それで君、小川の激して居る民論を鎮壓するのは當然君の任務だと思ふんだ。一つ大に盡力して貰いたいもんだが。」

「出来るか出来んか知れないが、やつては見ようよ。實際僕としても通勤の路が遠くなるのは感心せんからね。」

「然だらう。だから君一つ頼むよ。なに、小川の奴等が飽くまで主張を曲げなければ、此方でも同じ方法で戦ふさ。」

「大丈夫だよ、僕が必死になつて一つ鎮壓して見るから。」
山梨と古橋とは、細かい色々の打合せをして立別れた。」

二 閻魔に舌を抜かれそうな賣主坊主

古橋が辭し去つてから間も無く、小川の東圓寺の住職今田默然が山梨を訪ねて來た。東圓寺は眞言宗の古刹で、其住職は代々住民の尊敬を受けて、村の大事には必らず關係をして來たものであるが、現住の默然和尚は小才が利いて且つ辯舌の達者な處から、ちよくく色々な事に口を出して、殊に共有山問題では、地所が此人の名になつて居る所から、批難やら怨みやらの的になつて居るのであるが、それでも他に小川に人物の無いのと、古い習慣の惰性で、今でも何か事のある際には、區民は、區長の外には此和尚を唯一の頼みとして相談を掛けて居るのである。

默然和尚は金齒に笑を漏らし乍ら、
「やア先生、過日は失禮。」

と、山梨に迎へられて、應接室へ入つて来た。

「いや私こそ失禮しました。時にどうも貴下の腕の牙え加減には驚きましたよ。」

「あは、小供は如何も無邪氣なもんでなア。あは、いやもう薪に油を注いだ勢ひでしてな。」

「彼んなに猛烈に始まらうとは實際思ひませんでしたよ。然し一つ弱つた事が出来たです。」

「何だ、弱つたとは。」

「外でも無いですが、今も夕月の區長が來ましてねえ。小川の人民を宥めて呉れと云ふんです。一應は斷つて見たですが、それが貴様の職責だらうと云はれた時には冷汗が出ましたね。」

「あは、そんな事かい。そんな事なら先生何でも無い。はい、宜しう御座ると云つて置けば可いのだ。」
「然は云つて置いたですがね。」

「そう、それで結構、眞面目くさつて宥めようなぞと思ふ馬鹿者があつかい。此事が成就すれば、先生は差向き十七學級の大校長、郡内でも覇を稱せられると云ふものぢや無いか。確乎臍を固めて居て貰ひ申しませうは、先生まだ存外悪黨で無いねえ。そんな事は如何でも可いとして、實は今夜れ約束の相談會を寺で催さうと思ふが、一つ出掛けて大に煽動して下さらんか。」

「そりや遣りますよ。大に遣りますよ。皇國の興廢此一舉に在り、各員奮勵努力しない譯に行きませんからね。」

「そう大悟して來れると大に話るて。では今夜は間違ひなく御出席を。」
「承知しました。が如何でせうな、私がそんな處に出席したと云ふ事が後で分ると職務柄當惑するですが。」

「そんな事は大丈夫、皆なに確り口留をして置くから。」

「區民は實際に激昂して居るですか。」

「居るとも、實に無邪氣千萬なもので、寧ろ可愛らしいね。區の爲めに此

際決死の覺悟でと云ふと、ちやんと其覺悟をして來るんだよ。實際それが底の底から區の爲めになるものか、人の利益の犠牲に供せられるか、そんな事は一向無頓着なんだから、こんな閻魔に舌を抜かれそうな賣主坊主も偶には氣の毒の様な氣がしてな。あはゝゝゝ。」
默然は大きな聲で、四邊憚からず笑ひ棄てるのである。併し直ぐ聲を落して、

「したが、先生、あのれ約束は間違ひ御座るまいな、愚老の悴を代用教員に使つて下さると云ふ……」

「そりや此合併さへ成功すれば、其位の事はいと易い事ですよ。」

「で、愚老も骨を折る甲斐があると云ふものだ。どれ、そんなら又歸つてソロ／＼晩の會の支度でも致すとしやう。」

其夜山梨は寂かに小川に出掛けて、區民の重立つたものと東圓寺に會合した。

三 臨時村會

臨時村會が開かれて、學校の合併は一寫千里の勢ひで議決されて了つた。夕月、朝日、春日、それに秋山の一部は猛然として其反對に立つた。區民の意見を村長に申出す者、郡長に陳情する者、其外色々の手段で極力之に反對を表した。が是等の反對は總て一蹴に附せられて、間もなく郡役所から合併の認可書が着いた。反對側の村民は皆な轟々として、監督官廳の不親切を鳴らした。中にも春日區民は、年來丹精して拵らへた學校の基本財産を、合併と共に持ち去られるのを惜んで、激烈に反對した。此形勢を見た清水市の羽織ゴロ村田某は明星村にやつて來て、春日の或る家を借り、少なからぬ傍聴料を取つて演說會を開いた。人心の激動して居る際であるから、聴衆は轟々と會場に詰め掛けて、定刻には立錫の餘地も無い盛況を極めた。

時間が來ると俄拵らえの演壇の上に、村田は五つ紋付の羽織に仙臺平の

袴を着けて現はれた。折々此村に現はれて村民を苦しめては「霸王」と名
されて觸れば棘に刺されると忌み嫌はれて居た彼れも、今日は村民の味方
と云ふのを看板に意氣揚々と、
「諸君」

と、咳一咳した時に、無邪氣な聴衆はバタ／＼と手を叩いた。

「諸君、諸君は他人が来て諸君の生命を寄越せと云つた時に、諸君は素直
に其生命を差出すべきでありませうか。吾輩は信する、諸君は決して此要
求に應ずるもので無い事を。何となれば、生命は諸君の最も大切な所有品
であるからである。若し此の大切な所有品を、謂はれも無く他の要求に應
じて差出すものがあるならば、それは卑怯にして常識なき狂者の處爲であ
る。吾人は斯かる狂者と決して伍する事は出来ない。而して諸君、今本村
の大問題となつて居る處の學校併合問題は如何であるか。是れ諸君の子弟
の魂を作る場所では無いか。生命を作る處の神聖なる場處では無いか、そ
の生命と均しき大切な諸君の所持品は今や謂〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇
と

て居るのである。あゝ諸君、何者の權利あつて〇〇〇〇得るのであらう。吾
輩は諸君が決死の覺悟を以て、此權利を擁護せらるゝ事を信じて疑はぬの
である。

村田が此う叫んで卓を叩いた時、聴衆は熱した調子で、家も揺がんに許り
に喝采した。村田は更に刻々に集まつて来る聴衆の傍聴料が多くなるのを
當て込んで奇矯なる言を一段と進めるのであつた。

「諸君、諸君の愛子の殺さるゝ時、誰か諸君に向つて適當に驚けと云ふ者
があらう。吾輩は諸君が此問題に當つて、極端に驚き極端に怒る其裏情に
對して、満腔の同情を禁せざるものである。」

聴衆は更に拍手を惜まなかつた。村田は次第に其演説を進めて、終りに
此う言ふ句を以て演説を結んだ。
「理論を以て事を行り得る間は、諸君は靜肅に理論の上に行動して、其處
志の貫徹に努めなければならぬ。けれども一旦理論が既に通用せざる時
代に入るに及んでは、諸君は直ちに〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇〇なる〇〇

に出でねばならぬ。この〇〇〇〇〇〇は即ち萬障を排除し得る唯一の途なる事を、諸君が了得せられん事を吾輩は希望して止まぬのである。『非常の決心！』

と、一人の傍聴人は叫んだ。

「然だ、〇〇〇〇〇〇外は無いなだ。」

と、未だ若い一人の傍聴人も叫んだ。

「やるべし。」

「やれ〜。」

「小川の區長を遣つ付けろ。」

「賛成する奴は皆殺しにして丁へ。」

と、口々に絶叫して、會場は早くも殺氣に漲つた。演壇を下りた村田は、傍聴料を強か懐ろにして、時分はよしとて、

「何處へか去つて了つた。後に熱し切つた春日の區民たちは、

「小川へ行つて賛成論を叩き潰して來よう。」

其ま

と、云ふ説に同じて、二三百の人は會場を立出でた。

「春日の人が押寄せて來る。」

と、云ふ警報は小川の區長や區民を一方ならず驚かせた。どんな亂暴をせぬとも限らぬからと、區の重立つた人は直ぐ消防夫を集めて、區長の庭を

警護させた。

「小川ちや消防組が待て居る。藁口を揃て邀へ戦ふ用意が整つて居る。」

と、云ふ報知が、小川に押寄せようとして出掛けた春日の區民の間に傳へられた時、春日の人達は、

「よし、小川がそんな失敬な事をするなら、此方にも覺悟がある。」

と、叫んだ。二三百の人は飛んで家に歸つて、草鞋脚絆に身を堅めた。そ

して鋤、鍬、鎌、山刀、鉞、斧、それらの得物を手に手に携へて、春日尋

常小學校の庭に勢揃ひをした。秋山から態々馳せ加はる者も少く無かつた。

四 竹槍蓆旗の一大騒動

春日の人民軍は堂々として南の方小川に向つて進軍した。小川の消防隊も區の境で春日勢を喰止めようとして北に向つた。

報を得た朝日の駐在巡査は清水の警察本署へ急電を發すると同時に、宙を飛んで小川に馳付けた。大和村長も亦急を聞いて取る物も取敢えず急行した。巡査や村長が小川の區長の許へ駈付けた時は、もう衝突が始まつたのであらう。春日に寄つた方で恐ろしい人の聲が聞こえて居た。巡査が劍を擁へて飛ぶ後から、村長は袴を蹙めて、息を切らして續いた。

兩軍は今、小川と春日の境を流れて居る花澤川まで押寄せて、僅か七八間の流れを挟んで對陣して居るのである。

「フーッ。」

ど、聲を揚げて春日勢が橋を渡り初めると、小川勢も同じく、

「フーッ。」

ど、聲を合せて橋の上に進む、橋の中央で睨み合つては双方へ引返して居たのが、二度目には橋の上に入亂れて殴り合ひが始まつた。巡査は息つき

敢えず、其中へ飛込んで、

「こらッ止めんか。騒いでは不可ん。」

ど、最先の一人二人の腕を捉へた。氣の立つて居る時であるから、捉へられた手を振放すと、

「此のヘッポコ巡査。」

ポカリと巡査の横面を殴つた。餘勢で、其帽子はヒウ〜と河の中へ落ちて行つた。

「コラ、本官に對して暴行を働くか。」

ど。眞赤になつて巡査は怒つた。

「本官もトンチンカンもあるもんか。黙つて引込みやアがれ。」

又ポカリと頬の邊りを見舞はれて、巡査は眞青になつて怒つて了つた。

「無禮な奴だッ。」

スルリと洋劍を引抜いたので、猛り切つて居た双方の人民もバラ〜と兩方に開いた。

「やア抜いたな、抜いたな。」

巡査は水車の様に其剣を橋の中央で振廻はした。宛で狂者の様である。
「危い、危い。」

見物の人は口々に叫んだ。息を切らして漸く駆けて来た大和村長は、これを見て、

「長谷川さん。」

ど、呼び掛け乍ら巡査の傍に駆け寄つた。

「長谷川さん、危ない、サアベルをれ仕舞ひなさい。」

ど、叫ぶのを、如何聞き間違へたか、長谷川巡査は、

「此野郎。」

ど、一刀村長に斬付けた。村長はバツと身體を開いたが、肩から二の腕に切先が軽く當つて、タラ〜と血が流れた。

「アッ。」

ど、村長は腕を押さへて、グラ〜と其場に倒れた。此時始めて村長である事に氣の付いた巡査は、

「や、村長さんでしたか。」

ど、馳け寄つた。

「濟まん事をしました。長谷川一生の誤り。あゝ濟まない。大和さん、何卒に許し下さい。ツイ人民が抵抗するのだと思つたものですから。」

ど、長谷川巡査はワナ〜と顛へて、目からは涙が流れて居る。洋剣は何時の間にか鞘に納まつて、固く其柄を握つて居る。

「村長さん、如何しました。」

ど、双方の人民が集まつて来る。得物は持つて居るが、誰も唯だ睨む計りで、武器を揮ふ者は無かつた。

村長は人々に助け起され乍ら、創を改めて見て、

「御心配下さるな、ナニほんの少しの微傷でした。」

「如何も何とも實に……誠に以て相濟まん事を致しました。何分此事は御内分に……どうぞれ許し願ひます。」

と、 巡査は人心地もなく詫び入つた。

「なアに別段の傷ぢや無いんですから、内分も何も有りやアしません。」
と、 村長は痛む傷口を押さへて苦笑した。

「酷い事をしやがる野郎だ。」
「宛で狂巡査だ。」

と、 人々は罵つたが、 長谷川巡査は唯だ黙つて下を向いて居た。

「私の傷は如何でも可いが、 皆さん、 此場は何卒私に任せて、 今日引取つて下さるまいか。」

此不意の出来事に氣先を折られて、 春日も小川もモウ戦ふ勇氣は無かつた。

「ねえ皆さん、 悪い様には計らはない。 必ず皆さんの満足する様な取計らひをするから、 此處は是非私の顔に免じて一旦引揚げて下さるまいか。 大和が折入つてくれ願ひするです。」

「ぢやア春日の言分の通る様にして下さるだかね。」

「村の方々の多数の意見を尊重して、 出来るだけ盡力します。」

「多数ツて言へば据置だんべえ。 何と、 任すまいか。」

「村長さんが任せと仰言るなら、 一旦は任せねえ譯にも行くめえ。」
「それに此んなに怪我して御座らつしやるで、 今日帰るとしよう。」

さしもに猛り立つた春日勢も、 潮の退く様に其場を引上げて行くのである。 村長は人々に助けられて朝日の我家に立歸つた。

五 慈愛の懷に救はれて

村長の創は存外浅かつたので、 一週間もすると繃帯を取つて、 絆創膏を貼るだけで可い様になつた。

駐在の長谷川巡査は、 酷く自分の暴行を後悔して、 朝夕村長を見舞つては詫言を繰返して居た。 固より親切で好人物な村長の事であるから、 巡査が全く其凶暴な動作を羞ぢて、 それ以來生まれ替つた様に謹直になつて、 村民の保護を心の底からして呉れる様になつたのを悦んで、 自分の創の事

は殆んど忘れた様に、
 巡査を慰めて呉れたのである。けれど、激昂して居る村の人々は、
 巡査の亂暴を太く憎んで警察本署へ委細を上申した。彼の騒ぎの時、
 長谷川巡査の急電に接して、次の輕便列車で急行して来た清水警察署長は、
 村民から委細は聞取つて、歸ると直ぐに長谷川巡査の處分を取計らつた。
 丁度三日目の正午頃、本署から召喚の命に接した長谷川巡査が、
 急いで出頭すると、特別の恩恵で免職だけの處分にしてやる。刑事上の處分は大目に見てやるからとの旨に、
 巡査は悄悄と村に歸つて来ると、翌日は早や後任の人がやつて来た。
 身から出た錆を今更嘆いて、長谷川は村長の宅に告別に行つた。

『それは實に意外な事で、
 ね氣の毒千萬ですな。』
 村長は親切に言つて呉れた。

『どうも據る御座いません、
 自分で蒔いた種子を自分で刈入れるのですかと、
 情氣るのを、』

『で、何ですか、是から如何なさうと云ふので？』

『さア其邊の事に實は當惑して居るので……何しろ突然の事で御座いますから、
 全然方向も立ちませんです。』

『ではれ困りでせうな。差當つてれ住ひにも差支へてお出でせう。』

『はい、今日駐在所も明け渡さなければならん始末ですが、行くべき處もありませんから、
 近所の民家にでも頼んで一時居らせて貰はうかと考へて居るんです。』

村長は稍や思案して、

『ぢや如何です、
 宅の裏二階にでも来てお出でになつては。下は物置になつて居て、
 まるで仕方がありませんが、二階は少し片付ければ御夫婦ぐらゐ居れん事はありませんよ。
 彼處なら母屋とは離れてますから、お蒼蠅くは無いでせう。
 そしてまア何か貴下の職業の見付かる迄、奥さんが裁縫でもおやりになつたら可いでせう。
 役場でも切符書きなんぞの忙がしい事が、
 ちヨイゝゝあるのですから、
 然様時には貴下にお願ひするとして、
 なに』

ケ月や二ケ月暮らせんと云ふ事はありませぬよ。それに大根や葱の様なら、宅に幾何でもありますから、畑から取つて来て召上がつて居れば可いので。」

長谷川は首を垂れて、黙つて聞いて居たが、熱い涙が我知らず畳の上に二三滴落ちて来た。

「不埒を働きました私に對して何から何までの御厚意、お禮の申し様も御座いません。」

「何の、そんなお禮ぢや却つて痛み入りますよ。」

長谷川は其夕方、駐在所を出て、妻と共に大和家の裏二階に移つた。其敵を愛すること隣人の如き、慈愛の懷ろに救はれて、長谷川も其妻も、此人の爲めならば生命も惜からじと感涙に咽んだのである。

村長は創が癒えてから、小川に行つたり、春日に行つたり、村内を東奔西走して、學校問題の爲めに斡旋したけれども、小川區民の合併の決意と、

それに賛成する村會議員や村内有力者の同盟は頗る堅固で、容易に合併取

消といふ事が出来なかつた。それと同時に村會の決議を以て一旦合併を申請して知事の許可を得た其指令を變更する事は、絶対に困難なる事であつた。それで村長は、村の折合の上から、今度は春日秋山などの人民を説いて、合併に同意して貰はうと骨を折つて見たのである。併しながら、春日を始めとして、秋山、夕月等の人民の一致した反對をば、鎮めると云ふ事は思ひ寄らざる成行であつた。村長も實は途方に暮れて了つた。形勢の面白からぬのを見て取つて、春日の區民は又集會をして、合併取消の目的を達する迄は、村税は一切納めぬと云ふ堅い約束を取極めた。秋山も應て其同盟に加はつた。此事を傳へ聞いた夕月區民も亦全区一致で村税の不納を決議した。其年度の第一期徴税は非常の不成績で、役場は學校職員の俸給さへも支拂へぬ破目に陥つたのである。

六 狂態と痴態の有りたけを盡して

明星村の人氣は益々悪くなる許りである。合併派と非合併派と、兩々鎗を削つて事毎に衝突した。村會には又正義派と権力派とあつて、権力派は其多數を恃んで、今迄も校長の排斥などをして、心ある人の眉を擧めさせたのであるが、今度も合併派の肩を持つて、横暴な決議をして、合併の許可をさへ得たのである。之に對して非合併派は、〇〇黨の代議士の人氣取り策に行つた煽動助勢に、愈よ其勢ひを加へて、猛烈な非常手段を其方針とした。

非合併派の夕月區々長古橋謙三、秋山區民吉田彌作、春日區民中川利吉は、反對派の區民から共有山横領の告訴を裁判所に提起されて、三人は清水地方裁判所の検事局へ二三回呼び出されて酷く脅かされた。場合に依つては監獄へ拘留しなければならぬが、逃走せぬと云ふ誓約書を出すならば當分其儘に置いてやらうと云ふ事で、三人は検事に誓約書を取られて、蒼くなつて村へ歸つて來たが、非合併派の方では、江戸の響を長崎で取る様な合併派の處置を大變怨んで、何もがな仕返しの方法をと肝膽を碎いて居た。

小川の區長の息子樋口要一と、女教員桑田照子とは醜關係があると云ふ噂が又新らしく村内に喧傳された。あらぬ事まで然も有つた事の様に拵らえて、合併派の名譽を傷つけようと云ふ計略なのである。

之に對して合併派は又非合併派の誰々が不義理の借金をして居るとか、良からぬ女に關係して財産を蕩盡したとか、〇〇黨に買収されて其節操を二三にしたとか、種々様々な流言を放つて、己が勢力を増さうと試みた。

信託會社の態度は校長の態度と共に久しく知られずに居たが、山梨校長が今以て其可否を言はぬ不思議さは、敵味方双方の疑問たること依然であるが、會社の落合は由來なくも合併派たる事が知れ渡つて、以來非合併派の人民は、憤然として會社に對する敵愾心を高めた。

落合は依然として毎夜賣新亭に入浸つて居た。お花とお峰の色香に迷つて、兩手に花と狂態と痴態の有りたけを盡して、會社の金を湯水の様に使つて居た。賣新亭ではよいお客様と下にも置かず欺待すので、獨身者の落合虎雄は、會社の役宅に寝るよりは結局氣樂だと言つては、大抵の晩は賣

新亭の奥座敷に寝た。朝會社に歸る時は、賣新亭の裏口から、お花かお峰が必らず送つて出るのであるが、それは何時でもシドケない、寝亂れ髪をして、人目を憚かる様に、

「今夜も来て下さいませませうね。」
と、小さな聲で言ふのが常であつた。

「お峰は僅か半年ばかりの内に、見違へる程大きくなつた。そして毎日毎晩、男に接する故か、其容貌もめつきり成人びて、艶やかさにお花と共に賣新亭の二美人と歌はれて、朝日は愚か、近郷近在までも評判の女になつた。

春も漸く更けて、櫻の若葉が青くなつて來る頃、お峰はフト病の床に就いた。二週間計り寝た内に、さしも福よかであつた兩頬もゲツソリと瘦せて、血の氣は褪せて蒼白く、顔骨の邊りに薄い皮膚の下から僅かに櫻色が微めいて居る計りとなつた。そして緑の黒髪がバラリ／＼と脱け落ちて、今までは結ふにさへ困つたのが、小さな銀杏返にさへ難かしく、キリツと

鬢をつめて三つ組に編んで居るのを見ると、頭は昔の半分ぐらゐになつた様に見えるのである。

二十日計りしてお峰は起きてブラ／＼する様になつたけれども、お客の席には出られぬので、中庭の室で編物をしたり、新聞の小説を拾ひ讀みしたりして居た。落合は、

「峰ちゃん、氣の毒な事したね。」

と、お峰が寝て居る内も毎晩來て、優しい言葉を掛けてくれたが、お峰が起きる様になつてからは、如何したものかフツと姿を見せずなつた。

「落合さんは如何しなすたらうねえ。」

と、顔を襟に埋めて物思ひに沈んで居るのを、内儀さんは慰め顔に、

「何か會社の方でも忙がしくて居らつしやるんだらうから、今日にも又お出でなさるかもしれないやね。心配しないが可いよ。」

「けども内儀さん、妾こんな身體になつちまつて眞に如何しようと思ひますわ。」

「なアにもう少しすれば元の身體になるから、心配しないが可いよ。若い身だもの。」

『でせうか。』

心許なげのお峰の膝を、春の日は煦々として輝らすのである。

『内儀さん一寸。』

と、小手招きする下女のお勝の呼ぶまゝに、内儀は室を出て行つたが、『あら、困りますねえ。』

と、云ふ聲が店の方に聞こえると、ツカ／＼と商人體の男が入つて來た。

『岡本峰と云ふのは其方か、私は清水警察署の刑事だが、少し取調べる筋があるから、内儀さんと一緒に署まで來て貰ひたいのだ。』

『えッ。』

と、お峰は面色土の如く變つた。

「隙は取らせん。これから直ぐだ。」

お峰と内儀とは此男に連れられて、次の輕便列車で清水市へ行つたが、

七 深いく地獄の底へ

お峰等が拘引されたのは、非合併派が警察に密告したからで、落合虎雄も同じ日に拘引されて、三人とも清水監獄に收檻された。罪名は墮胎と云ふのである。

お峰が賣新亭へ女中奉公に住込んだのは、まさか醜業をしようとしては無かつたのであるけれども、年よりもませた其體格と、鄙には珍らしい其容色とは、お峰の身に禍ひして、賣新亭へ來る限りの遊野郎は、苔の花を手折らうとした。初物の香ばしさを鬼一口試みようとする慾念に驅られて直接お峰へ様々の誘惑を試みた。然し、幾ら發達して居ても年は年である、お峰は唯だ恐ろしさから其度に泣く計りであつた。或者は之をまどろしがつて、内儀から内々説得して貰ふ様に頼んだ。是等の狼連の内で、落合は殊に熱心で、有らゆる手段を盡して、年端も行かぬお峰を手に入れようと

したのである。處がお峰は此人の様々の手段をも唯だ怖がつて一向應じそ
 うとしたのであるが、猛獸の如き落合は一夜暴力を以て理不盡の望みを遂げよ
 自分の昔の受持教師であつた桑田照子の許に泣き込んだのであつた。
 悪魔の毒手は其れ位ゐの事でひるむものでは無かつた。お峰の厭がるの
 を無理に親元を脅迫して真新亭に歸らせてからは、義理に絡んだり、情け
 に絆したり、紙幣びらを切つたりして、四方八方から攻め掛けた。相談の
 相手も無く、頼る人も無い、纖弱いお峰が、どう思案に迷はずに居られよ
 う。是非の分別も付き兼ねて居た處へ、獸慾に満ちた落合は、一夜退引な
 らぬ破目にお峰を捉へた。荒鷲に取られた小雀と云はうか、暴風に弄ばれ
 た梅花の一片と云はうか、お峰は唯だ潜々と泣いた。泣いたけれども少し
 も抵抗はしなかつた。あはれ斯うして答は春風をも待たずに無理く散ら
 されて了つた。無残と言ふも愚かである。
 曾て知らなかつた或者を経験したお峰は、是れから性格がガラリと一變

して、脂粉に憂身を糞す様になつた。卑しい戯言を喜ぶ様になつた。女男
 の關係を述べた猥らな歌を好んで歌ふ様になつた。そして我から落合を迎
 へて、女の好く色々な物を買ひなどして貰つた。照子の許へ逃げて行く
 などとは、疾うの昔に忘れて了つて居た。
 秋去り、冬過ぎ、春が来て、お峰は愈よ女らしくなつて來た。シトシ
 降る春雨の日など、お峰は裏二階の欄干に凭れて、
 『眞に落合さんたら、今日は何故來て下さらないんだらうねえ。』
 なども獨語つ事もあつたのである。
 其内にフトお峰は心地の常ならぬを覺えた。胃が悪いかして、ムカク
 と胸が悪くなつて、幾度もく嘔吐しそうな事もあつた。生來曾て覺えな
 かつた蟲齒の痛さを感じた。そして何となく世の中が狭くなつた様に感
 じられて、動もすれば心が偏んだり、無闇に悲しくなつたりした。
 『妾もう捨てられたんだわ。落合さんはモウ決して來ちや下さらないん
 だ。』

と、泣いて内儀さんを困らせた事も少く無かつた。

「真に此子は如何したんだらうね。馬鹿に泣蟲になつちまつて、それぢや仕方が無いぢや無いかね。」

と、内儀さんは頻りにお峰の心を引立たせようとしたけれども、お峰は、

「内儀さん、妾もう仕方が無いと諦めたわ。逆も落合さんは妾なんか關つては下さらないんですよ。」

と、尙の事泣くのである。

「困つちまつね、此人は。そんな情け無い事ばかり言つて。そりや身體の

工合が言はせるのだから、身體さへ達者になれば、木の葉の落ちるのも可笑しいと云ふ年頃なんだもの。峰ちゃん、後生だから氣を浮々してね。職

業に身を入れて下さいよ。然すりや又好いお客も付いて、二度花の咲く時

が來らアね。」

「いゝえ内儀さん、妾捨てられて了つちやモウ二度と花の咲く時なんぞ有る様には思へませんわ。何だか妾此まゝ深い〜地獄の底へでも落ちて行

きそうですわ。」

「まア厭な事を言ふのねえ。なんなら峰ちゃん、お醫者様に見て貰つたら

可いでせう。そんなにブラ〜して、毎日〜泣いて計り居ちや、第一身

體が續きやしないわ。然う言や峰ちゃん、此節は大層瘦せてよ。屹度何か

身體に故障があるんだから、一遍お醫者に見せた方が可いわ。ね、悪るい

事は言はないから、宮田先生に見てお頂きなさいよ。明日行つて、ね。然

おしなさいよ。」

「だけど妾、お醫者様に見て頂いても、此んな悲しいのが治りやしないん

だから。」

「それもこれも身體さへ良くなりやア、自然と氣も引立つのですから、ね

然なさいよ。」

お峰は内儀さんの強て勧めるのに従つて、明日内儀さんに連れられて、

宮田醫院へ出掛けて行つた。診察を終へて、醫院の門を出た二人の顔は、
物凄計りに蒼かつた。

「内儀さん妾如何しませう。」

「困つた事になつたねえ。」

「真に困つちまつた。如何したら可いでせうねえ。」

「今つから子供が有つちや、食べる事も出来ないからねえ。第一、もうお座敷を勤める事も出来なくなると、妾の處でも頼んで置く事が出来ないからね。」

「ぢや内儀さん、妾を家へ歸すと仰言るんですか。」

「直ぐ然と云ふんぢや無いけれど、之で六月にも七月にもなつた日には、もうお客様へ出られなくなるものね。」

「然ると妾も御世話になる事出来ないんですね。」

お峰は袂に顔を蔽うた。

「妾家へ歸る顔は無いんですもの。」

「仕方が無いからね。妾歸つたら落合さんに談じて、何とか處置を付けて上げるからね。四月つて言や落合さんに違ひないんだものねえ。落合さん

だからつて、満更知らんとも言ひなされるまいから、そうなりや峰ちやん、旨く行きや落合さんの奥さんになれるわね。クヨクシないで、待つてる事ですよ。」

お峰は涙の顔を行き交ふ人に見られと、袖を當て、賣新亭へ歸つて来た。

八 獸慾の犠牲

内儀から落合虎雄に談判した結果、落合の返事は實に意外な返事であつた。

「籠棒ツ、淫賣婦の宿した胤が、何處の馬の骨のものか、保證が出来もんか。それを貴様の胤だなどと覆被せようと云ふのは、餘まり蟲が好すぎる話だ。よしんば乃公の胤にした處が、金で買った一夜の春で、先の先主で責任を帯びて淫賣買ふ奴が何處に在る。そんな話しは眞平御免だ。」

と、途徹も無い無責任の言ひ分、その儘バツタリと脚の道を切つて了つて、

賣新亭に寄付かうもしないのである。

お峰も内儀も且つ怒り且つ悲んで、人を立てたり何かして、幾度もく攻め立てたが、固より一時の獸慾の犠牲にした女を、憐れと思ふ様な心は露ほども無い落合は、嘆かうと頼まうと、受付ける気色は少しも無かつた。「内儀さん仕方がありませんわ、妾もう不運と諦らめましたから、落合さんが關つて下さらなくつても關ひませんわ。」

「ど云つて如何して峰ちゃん是从からお暮らしだえ。」

「さ、その事は……」

「それが困つて了ふでせう。妾昨夜も終夜寢ずに考へたんだがねえ。今此處で子供を生まれるとすると、先づ第一に六月七月から産むまではお座敷へは出られないでせう。すると私の處で眞に困つて了ふの。何さ、私どもも裕福な身分だと、一人や二人親類からでもお客が来て泊つてると思や、稼いでくれなくつても何でも無いんだけれど、峰ちゃんを知つてると通り、稼がなくちや食べて行かれぬ其日暮らしだから、眞に困つて了ふのさ。」

それから子供が生まれると、其當座やつぱりお座敷へは出られないでせう。まさか嬰兒を擁いてお座敷へ行く譯にも行かないからねえ。然すると如何しても二月や三月は遊ばして上げなくちやならないでせう。眞に困つて了ふわねえ。それでね、如何しても一旦家へ峰ちゃんに歸つて貰はなきやならないかと思ふんだが……」

お峰は聲を放つて泣き倒れた。

「それぢや内儀さん如何しても妾に歸れつて仰言るんですか。お父様は眞逆淫賣をしろつて奉公はさせはしませんのに、内儀さんが爲ろくつて妾に勧めて置いて、それで妊娠になつたら歸れつて云ふとは、内儀さん餘まりですわ。妾家の人に合はせる顔は無いですもの。如何しても内儀さんが置いて下さらないのなら、妾、し……死んで了ひますわ。」

「まア飛んでも無い。峰ちゃん、然うお前さんの様に怒つちまつては話にならないわね。今のはホンの筋途を話したただけなんだから。」

「でも内儀さん、もう置いては下さらないんでせう。」

「いゝえね、お前さんが如何しても居たいと云ふのなら、又妾の方にも考へがあるんだがね。峰ちゃん、そんなら家へ歸る事は眞に出来ないと云ふのかね。」

「歸る位なら、妾死んで了ひますわ。」

「ではね、言ふがね、峰ちゃん、怒つちや不可いよ。」

「怒りはしませんわ。」

「ぢやアノ……寧ろ墮胎して了つちや如何だね。」

「まア。」

お峰はガバと疊に獅噛み付いて、身を顛はした。だから怒つちや不可いと云つたのさ。峰ちゃんが厭なら強てとは言はな

いけれど、妾の方にはそれより外仕方が無いんだもの。」

「でも内儀さん、それは餘りですわ。」

「ぢや如何するとお言ひなの。」

「如何するつて餘りですもの。」

「そんなら仕方が無いでせう、矢つ張家へ歸るより……」

「家へ歸れるなら、此んな苦勞はしないんだけど……」

「困るのねえ。寧ろ如何しても一思ひにした方が可いと思ふわ。此處ぢや逆も出来ないけど、清水へ行つて心安いお醫者に頼んで、秘密でやつて貰つて了や、今の内なら目にも立たず、妾それが一番だと思ふの。二月や三月の内なら素人の手で如何とも出来るのだけれども、もう四月と云つちや親の身體に間違ひがあると大變だからね。」

「辛いわ内儀さん、妾こんな身體になつて……折角こうして神様が授けて下すつたお腹の兒を、世の中へも出さずに、闇から闇へ行かせるなんて、妾には如何しても出来ないんですもの。」

「眞に然う強情を張つては、妾の方でも如何する事も出来やしないわね。御免なさいな、内儀さん、そんな恐ろしい事する位なら、妾生きてる

空は無いのですもの。」

潜々と又袂を噛みメめて、身も浮く計りにお峰は我身の不幸を悲しむの

である。

九 夕づく日

これから一週間許りして、或日内儀はお産の軽くなる薬を醫者から貰つて来たどて、お峰に服用させた。お峰は喜んで二三日それを服んだのであるが、不意に腹痛を覚え且つ烈しい下痢を催はしたので、内儀も心配して撫でたり擦つたりして呉れたが、容易に治まりそうにないので、

「峰ちゃん、こりやお醫者に見せた方が可いわ。今から清水へ電報を掛けるからね。暫らくの辛棒だから、お醫者の来るまで我慢して下さいよ。」

と、内儀は最と親切らしく言ふのである。お峰は苦しそうな聲をして、

「此んなにお腹が痛んで、何だか小供が如何かして了ひそうだから、内儀さん後生ですから早くお醫者様呼んで下さいな。宮田先生で可いから。」

「宮田なんてへッポコ醫者ぢや駄目ですよ。妾清水の良いお醫者を呼んで上げるから、ナニ直ぐ来てくれますよ。輕便で一時間もすれば来られるん

だもの。」

其夕方清水から醫者の到着した時、お峰の腹痛は愈々激しかつた。醫者は病人の様な蒼い顔をして居たが、内儀と密々話をした末に、痛みに呆どしたお峰の處へ来て、

「痛くて苦しいでせう。今苦しくなくして上げますよ。」

と、囁いた。

「はい、何卒願ひます。」

と、お峰は細い、弱い聲で、訴へる様に涙の聲を顫はせた。

「宜う御座います。大丈夫です。さア診て上げませう。」

と、醫者は蒲團の中に小さくなつて力なく横はつて居るお峰の手を取つて第一に先づ脈搏を檢めた。それから呼吸から舌を見て、胸を寛ろげて肋の上を打つて診たり、下腹を壓して診たりした。

「少しの間顔を隠してお出でなさい。下部の方を診ますから。」

掛けて居た夜具を又元の通りにして、醫者はお峰の足の方に廻つた。お

峰は羞耻の情を催はして、両手で顔を掩うた。股の邊りに醫者の手の温か
く觸れるのを覺えつゝ、

「醫者は見終つて、内儀に、

「消渴ですな、消渴の爲に此うお腹が痛むのです。」
と、サモ最もらしく言ひ出した。

「そう致しますと何とか急に痛みの止まります様な工風は？」
と、内儀は心許なげに尋ねるのである。

「それは注射をしさへすれば……」
と、意味ありげな目を内儀に向ける。

「それをして頂けますでせうか。」

「お望みなら致しますせう。」

「醫者は内儀の顔をジツと見て、

「御決心次第です。」

と、附加へた。

「その積りで居りますんですよ。」

と、内儀は答へた。

「では。」

と、醫者は靴からカチャリと療治の機械と薬の瓶を取出した。お峰はチク
リとする針の痛みと、續いてヒヤリとする金屬の我が肌に觸るゝを覺えた
まゝ、我にもあらず生體を失つて了つた。

フツとお峰の氣の付いた時には、天井に高くボンヤリと電燈が點つて、
自分の周圍をお醫者と内儀さんとそれから、お花お勝の四人が取巻いて居
た。

「何だか妾胸がムカクしますわ。」

と、夜具の外に兩肩を伸ばすと、内儀さんは心配そうな目をお峰に向けて
「峰ちゃん、静かにして居らつしやいよ。今ねお醫者様が療治して下さら
うとすると、餘りお腹を痛めたものだから、貴女の調子が變なんぢや無
いか。それで少し見て居ると下り物がして來たの。」

成る程、お峰は自分の下腹が絞られる様な気がして、洪水の様に今子宮から何か流れ出るらしく感じた。汚れた繻緞片などが、其邊に敷らばつて居るのが見えた。

突然又お峰は甚だしく心地が悪くなつた。と同時に、腸も毛られるかど覺しく、下腹がデングリ打つて、ガバ〜と恐ろしい下り物がした。お峰は面を掩うて泣いた。

「アッ、小供が下りて了つた。」
お花が叫んだ。内儀さんは甲斐〜しく立働いて、一人で下り物の始末をしてくれた。

お峰は此時からモウ起き上がる力も無く、久しく病の床に横はつて居て、そして床を離れて漸と庭の散歩の出来る様になつた時は、昔の肥太つた姿は全く失せ果て、萎びた様な味も香も無い少女に變つて居た。そしてお座敷へも出なければ、随つてお客の願みるものも無く、お峰は日々獨り夕づく日を望んで、空しく我が暗き夜の近づくのを啣つて居た。

此うして落合とお峰と賣新亭の内儀は、墮胎の嫌疑で、清水地方裁判所へ拘引されたのである。

十 温厚な村長も遂に辭表を提出した

取調べの結果、落合虎雄はお峰と關係こそしたれ、決して墮胎には關係せず。そんな事は夢にも知らぬと云ふ事が判明して、検事廷から歸された。お峰と内儀は言開きが立たないで、遂に豫審廷へ廻されたが、それでもお峰は我身の事を思ひ、又主人の上を庇護つて、決して内儀に墮胎を勧められた事も無ければ、墮胎の薬を飲んだ事も無い。唯だ消渴が悪かつたので其の治療をして貰ふ際に偶然小供が下りて了つたのであると言張つた。此事件の發覺の動機が、明星村の紛擾の餘に出でたのと、お峰の年齢の少ないのと、其の主人を庇護ふ少女の心根とが、太く裁判官の同情を惹いて、一箇月ばかりすると、二人は遂に豫審免訴の決定を受けて、監獄を放免された。尤も之には醫學の方から確とした證據を擧げる事が困難なので

豫審判事も飽くまで追窮すると云ふ考へを止めたのであつた。
 合併派の墮胎事件は、遂にモノにならずに済んだが、犬の糞で讐を復ると云ふ風に段々兩派の壓轢が盛んになつて来て、屁を放つた様な事にまで刑事問題やら民事訴訟を昇ぎ出して、昨日は彼方に離婚、今日は此方で談判と、人情も風俗も悉く政争の道具に使はれて了つて、些しの潤ひも村治の上に見出す事が出来ない様になつた。

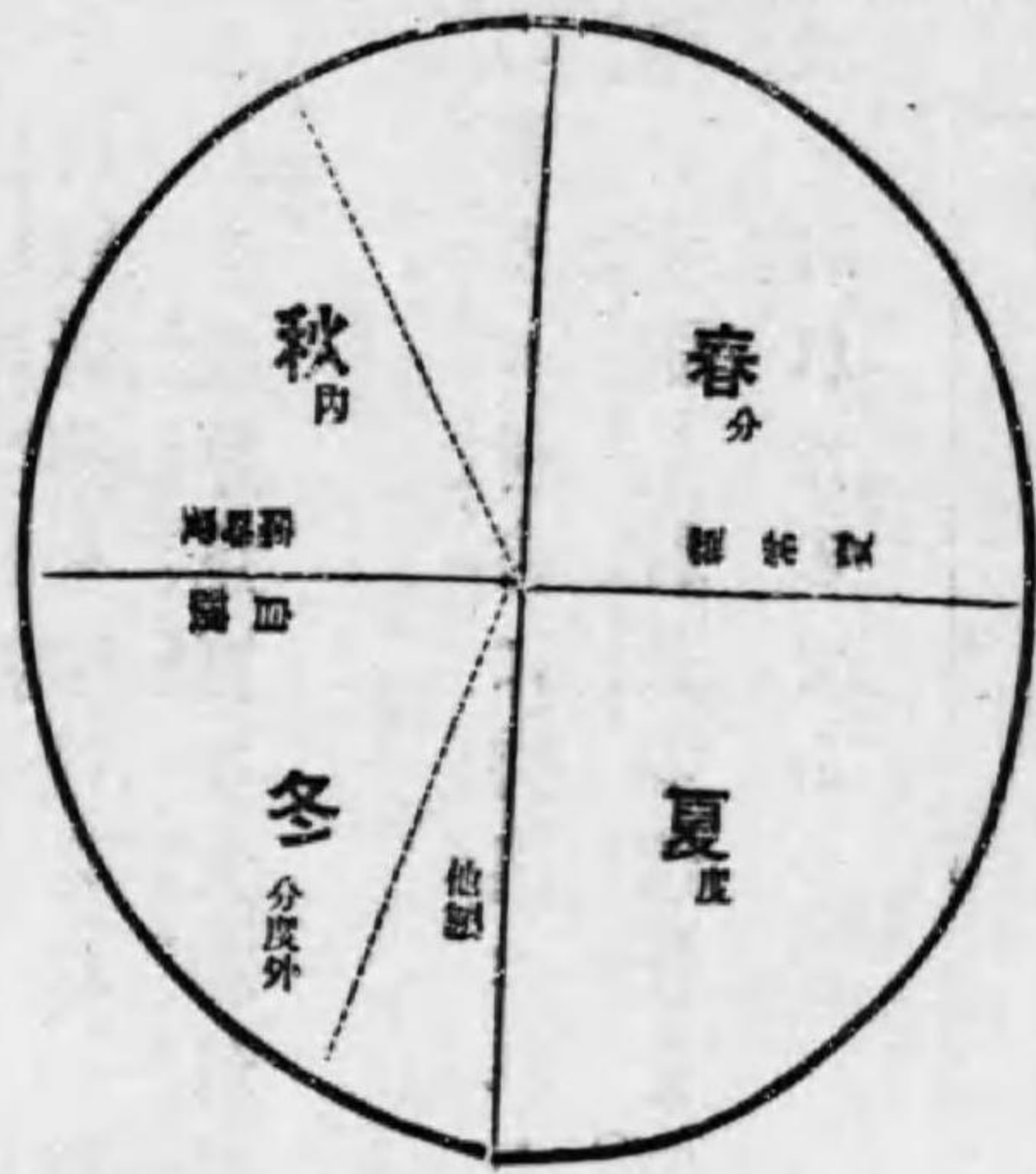
村長大和宗八の苦心は一通りでは無かつた。第一には仇敵の思ひをして居る各區の人々を如何かして和睦させねばならぬ。第二には役場に對する村民の反感を減じさせねばならぬ。それには役場内部の統一を圖つて、村政が一途に出る様にせねばならないのであるが、収入役や助役は皆村長に反對して、私利や利己にはばかり餘念が無く、村會議員は村會議員で、多數の者が横暴を極め、役場を壓迫して、村長の考へなどは少しも顧みられぬのである。大和村長は色々の非難や、矢表に立ち乍ら、今までは如何にもして、村の爲め、村民のため空かれ、我身の利害は顧みる處では無い

と、聊か獻身の誠を盡したのであるが、大厦の覆へるのは一本の能く支ふる處では無く、村長一人如何に盡せばとて、亂れに亂れた此難村は、如何する事も出来るのでは無かつた。のみならず、大和村長が斯くも私心の無い東奔西走も、徒らに合併非合併兩者の怨みを買つて、或は無定見と罵られ、或は内股膏藥を嘲けられ、果ては其信任さへ疑はれる破目に陥つたので、さしも温厚篤實な大和村長も、今は此れ迄と遂に辭表を提出したのである。

村長の辭表が村會に持出された時、二三の人は言葉を極めて、解任の理由なき事を主張し村長の留任を望んだのであるが、多くの議員は冷然として此辭表を容れたのであつた。

凡そ村治の極致は村人一般に生活の基礎を得せしむるにあり。
 (慈山)

報徳分度經濟法應用圖解



全収入を一年四時節の法則に従ひ、之を四分し、
春、夏、秋の三分を分度内の計とし、生活費に充て、
冬の一分を分度外の計とし、貯蓄及び他圖に充つ。

受け得たる徳を各々譲りなは、
四海のあいた父子の類し、
既に并大徳者身を助く、
其の徳は我を潤むるものなり。

第一圖

第二圖



第三圖



第十一章

一 旅の貧しい傳道者

敢て此問題が起つた爲めばかりと云ふ事は出来ないが、
學校合併問題が起つてからの明星村は、譬へて言はば戰國時代とも云ふ可き有様で、
友達同士の敵味方に立分れ、親戚も知己も、果ては骨肉の者までも、
山犬の様にいがみ合つて、淺ましい情け無い村の様子に變つて了つた。

明星村の秋山區と云へば、三方を山で圍まれた片田舎だけに、
風俗の敦いので、人々がよく一致するので、村内の他區は勿論、
餘所の村々から模範區として羨まれて居た處であるが、
此事件以來は、此區すら淺ましい争ひを生じて、
區の滅亡も遠くはあるまいと思はれる悲しい成行になつて
來たのである。

元來此の區は戸數五十の小さな部落で、
交通不便な山村の悲しさには、
教育のある人物は誠に少なかつたが、
それでも誠を以て寄集まつた團體の

結び合ふ力は、似非學問などをした輕薄な人物の寄合とは雲泥の相違があつた。

戦争の當時誰云ふとなく紀念事業が企てられて、先づ第一着手に試みられたのは勸業貯金組合であつて、区内五十戸の四十戸までが此舉を賛成して、月々の貯金は二十圓以上づゝも出来たのであつた。が星移り物變り、早くも豫定の五ヶ年を終つて、貯金組合は解散の時期になつたのであるが、折角一箇所に集まつた三千圓近くの金を、此儘各自に拂戻してしまへば、懸て雲と散り霧と消えて、五年の苦心も大した効果を擧げずに終るばかりで無く、此うした大金は二度と再び集める事は出来ない。されば折角の貯金を何かしら有用な方法で、尙も此上に利殖したならば、とは組合員多くの希望であつたのである。けれども別に之と云ふ名案も無かつた、丁度その頃、旅の貧しい傳道者が此村へ流れて來た。其傳道者と云ふのは、四十恰好の背の高い男で、耶蘇基督の様な瘦せた顔に威のある眼の半りを持つて居た。古ぼけた背廣服の肩は強か崩れて、頸飾は繩の様に燃れ疎らに垂れ下つた赤い頭髻は、灰色に汚れたワイシャツに反映して居た。

男は大きな幻燈機械の箱を重さうに肩に掛けて、草鞋の爪先を踏めて、秋山の區に辿り入つた。通り掛りの農夫たちは怪んで、

「何すら。」

と、囁き合つた。子守や小供達は變な人と云ふ目をしてシツと眺めて居た路傍に寝て居た犬は、俄かに立つて二三間畑中へ逃込んで、ワン〜と吠へ付いた。男は振向きもせずサツサと村へ入つて行つて、其處らに遊んで居た小供を捉まへて、

「區長さんの家は何處だ。」

と、聞いた。

「區長さんちん家はなア、彼處の家の處オ曲つて、一番向ふの大い槻の木のある家だに。」

と、云つて小供は馳けて行つて了つた。男は教へられた道を黙つて又歩き始めた。そして懸て區長の家の門を入つて行つたのである。

區長と云ふのは神宮寺勇と云つて、田畑山林の十二三町歩を持つて居る秋山での舊家なのである。勇は當年四十五六歳で、作男を使つて其等の者と一緒になり農業を營んで居るのであるが、其歳にも似合はず性來の讀書好きの處から、考想は思ひの外新らしく、理想もあつて、同情心に富んで居るのである。それで義侠の處もあつて、困つて居る人を助けた事も一人や二人では無いのであるが、残念な事には決斷力に乏しいのが此男の缺點である。云はれて居た。

傳道者は此神宮寺の門を訪れて、いま勇と縁先で頻りに話して居るのである。

「それでは何で御座いますか……當村で町村改良の幻燈會を開きたいと此う仰言るので……」

勇は傳道者の柄にも無い申出で、其怪しげな風采を、危なつかしそりに眺めた。傳道者は大きく點頭いて、

「左様です。私の年來研究し來つた報徳教と産業組合の話を見せて頂きた

いのです。その爲めに幻燈も此うして持つて居るのです。」

「それで何ですか、幾何か入場料でもお取りになると云ふ……」

勇は興行師か何ぞの様に傳道者を思つて居る。

「いや入場は無料で願ひたいです。」

「すると何か後で纏めてお禮でも致す事に。」

「否え、そんな事は何れとも御隨意で宜しいです。石井洋は此様な見すばらしい服装を致して居りますが、天上天下に獨歩して居る報徳教の自給傳道者です。唯だ食ひ得ればそれで満足して、一生を報徳教に捧げ、産業組合や町村自治の指導に盡したいと思つて居るです。要するに會場と一夜の宿を御周旋下されば、私はそれで十分なのです。」

爛々と輝く傳道者石井洋の眼光は、多年の苦節に磨かれて、寧ろ物凄く勇の面を射た。勇は愕然と顔を上げて、

「では貴下は然うして年中方々をお廻りになつて居るのですか。」

「然です。乞食の様な生活をして、食ふや食はずに日本全國を廻つて居る

のです。財産と云つたら此舌と幻燈機械が唯一の財産なんです。はゝゝゝ
寧ろ呑氣ですよ。」

物に係はらぬ性質と見えて、其奥深く輝く瞳も、明星の笑む様に笑つて
居る。勇は思はずも石井の赤誠に打たれて、其夜我家に村人を集めて幻燈
會を開き、且つは石井の宿をする事に心を極めた。

二 盥の水の譬喩

其夜の傳道者石井洋の講演は實に熱烈を極めたものであつた。

「心の無い鼠を御覽なさい。あの小さな獸すら、同類が人間の罠に掛つて
死んだ時には、其死骸の周圍に集つて来て、機よくば死骸を持ち去らうと
致します。紙袋の鮑を取る爲めには、數匹が協同して、交るゝ其尾を水
に濡らしては、紙袋を濕すのです。卵を盗み去る爲めに、一匹が仰向いて
卵を擁くと、他の數匹が其鼠を啣へて穴に歸る事は名高い話してはありま
せんか。曾て或人が鼠の多いのに苦しんで、硫黄を燻して鼠狩をした時に

小さな一匹の鼠が大きな鼠を背に乗せて逃げるのを見て、打殺さうとした
が、よくよく見れば其大きな鼠は兩眼盲いで、毛さへ白くなつた年寄であ
つたので、其人も惻愷の心を起して、遂に其儘見通がしてやつたと云ふ事
であります。あゝ皆さん、心の無い鼠すら斯様に協同助力と云ふ事を知つ
て居ります。人間として如何して此お互に助けると云ふ事を等閑にして可
いものでですか。あゝ皆さん、此協同の前には、總ての不利益不便の幕は切
つて落されて、其處に光り輝く黄金の舞臺が展かれてあるのです。人民を
幸福にする方法は、此協同を措いて決して他に在るものではありませぬ。」
一語く熱烈な句調は一座の人を酔はせる様に座敷中に鳴り響いた。
「皆さん、此協同と云ふ事を妨げるのは唯だ一つの利己心排他心と云ふも
のがあるからです。お互に唯だ自分さへ好ければ可い。人は蹴飛ばしても
關はないと云ふ間違つた考へがあるからです。けれども皆さん盥の水で考
へて御覽なさい。自分の方へ許り水を欲しがつて、一生懸命に我が方へ搔
寄せると致しませう。其結果は如何で御座いませうか。搔寄せた水は、我

が手の隙間を潜り抜けて、先方へ流れて行つて水面の平均する迄は止みません。若し又之と反對に、先方へばかり水を押しやつて御覽なさい。押しやつた水は、押しやつてもくゞ矢張り平均する迄は此方に流れて來るのであります。我身ばかり可愛くて人の難儀を顧みず、利己一點張りで、金銭物品を我が方にのみ掻い込もうとするのは、丁度今申した盃の水を此方に掻くのと同じで、儲けたいくゞと思ふ傍から、財寶はドシくゞ先方へ流れ出て了ひます。そして残るものは人々の自分に對する憎しみと、貪慾の悪名のみでは有りませんか。之に反して、他人の爲め世の中の爲にしようと考へて居ると、向ふへ押しやつた盃の水の様に、何時の間にか矢張り其餘徳が自分の手元に歸つて來るものであります。利己で掻込むのも、公益で押しやるのも、畢竟自分の身に來るものは同一であつて、そして一方は人々の憎惡を買ひ、一方は有難い嬉しいと思はれる事になります。皆さんは何れの道を取らうとお思ひになりますか、言ふ迄も無く、公利公益の大道を進まうとなさるに違ひないのである。果して然らば此秋山區を幸福な部落

にする事は朝飯前である。否、明星全村を幸福な村にする事も、皆さんの努力次第では決して難かしい事では無いのであります。」

石井は語を切つて、暫し其頭を整理した。黙々として聴き惚れて居る區

民は、石井の次の一語も聞き落すまじと、熱心に耳を時てゝ居るのである。「承はれば此秋山區には既に三千圓近くの共同貯金があると云ふ事で御座います。今回貯金會を解散して其金を名々に分けると云ふ事である。實に惜いと云はうか残念と云はうか、私は言葉に苦しむのである。三千圓は三千圓としてこそ價値のあるもので、之を五十圓百圓の零碎の金にして丁つたのでは、假令幾百人が之を所有して居ても何の役にも立たぬのであります。私の信じて居る報徳教の教へに従へば、四十戸の區民の有して居る三千圓の金は、正に十二萬圓の通用をするものである。何となれば、此三千圓を甲の人に貸して、三千圓の財産を作らせ、其財産から生ずる利子で年賦の方法に依つて之を償却させ、次に又之を乙の人に貸して同じ方法でするとすれば、此三千圓の資本は、取りも直さず、組合員四十人に各三千

圓の財産を作らせる事が出来て、十二萬圓の通用をする事になるのである。又之を産業組合の側から見れば、此資本は購置組合でも信用組合でも生産組合でも販賣組合でも作るに十分であつて、それが爲めに受くる區民の便利と幸福とは、數へ切れない程である。」

石井は尙ほ語を續けて報徳教の神髓に説入り、模範自治村稻取村の實況から二宮尊徳翁の一代記まで、幻燈を應用して、巧みに説去り説來つて、其演壇を降つた時には、感動した聽衆の拍手は暫しは鳴りも止まなかつた。

三 永安社云ふ報徳主義の社團

傳道者石井洋の去つた後、神宮寺勇は熱心な報徳教信者になつた。そして區内の有力者と相談して、愈々石井の勸告に従つて、六十年計畫の秋山協力永安社と云ふ報徳主義の社團法人を設立した。永安社の仕事は道徳と經濟の併進を圖り區民の向上發展を謀るのが目的で、まず第一は益々貯金を殖して組合員の生活を大丈夫にする事であつた。

第二は今迄の三千圓に加へて、今後月々に積立つて行く貯金を、家資金と稱へて、組合員に無利息で貸し與へ、生活の基礎になる財産を作らせて、元金をば年賦にして返させると云ふ方法であつた。この二つの大目的の外には、様々な公共事業に助力したり、農産物の品評會を催はしたり、精農者や善行者を表彰したりするのであつた。

區民は永安社を喜び迎へて、毎年六月の麥秋には大麥一斗以上を事務所に持寄り、又十一月には甘藷一俵以上づゝを持寄つて、それを賣拂つては家資金に加へ、毎月の常集會には、繩を縛つて行つたり、夜業をした所得を出したりして、善種金に寄入して居た。

神宮寺勇は永安社の社長に選舉せられて、至誠を以て其事務に當つた。副社長と言ふのは、中畑得助と云つて、親譲りの田畑山林十八町歩を持つて居る所から、村内第一の資産家と崇められては居るが、謂はゆる金が物言ふ當世だからこそ之も通用して居るだけの事で、三十一歳と云ふ今の若さに理想とか名譽とか云ふ焼いて食つて腹の張るでも無い晝餅は一切御免

を被ると云ふ、チャキ／＼の現代黨、併し流石に良心だけは未だ消え残つて居ると見え、永安社の相談を受けた時に、そりや可からうと賛成して、爾來社の爲めに社長を助けて事務を處理して居るのは、謂はゆる鬼の目にも涙の諺を今様にした見物である、區民の口善悪なき者は嘲つて居る。けれども社長も副社長も、理事の筒井亦助も近藤奎右衛門も、六名の評議員も、社運の發展に就いては、決して等閑の考へは持つて居なかつた。一月二月と進み、三月四月と絶つ内に、定款はよく勵行されて、貯金も次第に其額を増し、一週年の紀念會には、副社長中畑の發議で、二百五十圓の金を投じて社の事務所を新築する案も可決されたのである。此頃丁度學校問題が、急に明星全村に喧ましくなつて來た。そして秋山區民の多くは合併派で、永安社長たる神宮寺も勿論そうであつたが、獨り副社長たる中畑は、何者に語らばれたのか、非合併派に屬して居たが、心に幾らか疚しく思ふ所があると思へて、明らさまに其意見を發表する事をせず、唯だ曖昧にお茶を濁して居た。

四 黃道吉日を選んで

中畑の宅地續きに川上と云ふ一軒の織屋があつた。工女七八人を使つて、機械機で毎日／＼白布を織つては、それを紺や淺黄の色々の形に染め上げて、清水市の織物問屋に送つて居た。機械界の景氣の好い時に少なからぬ儲けがあつたので、漸次に仕事を擴めて、今日の様に盛大に赴いたのであるが先代が四十年前に此村に流れ込んだ時には實に慙然なるものであつた。編笠一蓋で少し計りの手荷物を負つて、親子三人が見すばらしい服装で、僅かに昔の知己であると思ふ縁故から秋山第一の財産と云ふ中畑の庭に立つたとき、中畑の家の人から危ふく乞食と間違へられて追拂はれようとしたが、其時中畑の先代が丁度縁側から之を見て、呼び近づけて色々事情を聞き取り、一先づ中畑家に草鞋を脱がせ、その内に地内に一戸を建て、資金を貸してやつて、豫て腕に覺えのある機械業に取付かせたのであるが、元より相當技術のある處から、間も無く一廉の營業をし出し、父の死亡後

三三〇
當代の政太郎が其跡を承けて、中畑の信任を得るまゝに、資金を中畑から引出して、愈々業務を擴張したのである。

政太郎は今年四十八歳の分別盛りで、正助と云ふ二十二歳の倅がある。正助は當時の若い者には似ず、實直に働く處から、近所での評判もよく、我娘を嫁にやらう。貰つてくれぬかと云ふ者も少なく無かつた。其内に或る親戚からも同様の申込があつたが、正助の氣に如何しても入らない。何とか斷わらうと思つたが、之と云ふ口實も無いので、止むなく中畑の勢力を利用して、親戚からは貰はない方針だと斷つて貰つた。丁度その時、別の親戚にお松と云ふ十八の娘があつて正助は彼れなら貰ひたいと云ふし、政太郎や妻のおよしも最と好もしく思はぬでは無かつたけれども、中畑には前に斷わつて貰つた關係もあるので、今更他の親戚から貰ひますから媒酌をしてくれども云ひ兼ね、止むなく神宮寺が秋山で第二番の勢力家であるのを頼んで先方に交渉を遂げ、黄道吉日を選んで之を迎へる事になつたのである。之を見た中畑は自分の面を踏潰されたと甚だ快不に思つて、

政太郎の處置を腹に据ゑ兼ねて居たので、思ひ内に在れば自づから外に現はれ、政太郎も中畑の心を計り兼ねて、一つ地内に居ながらも成るたけ顔を反向ける様になつた。中畑は政太郎の此舉動を更に面白く思はなかつた。其時まで、政太郎は資本の不足した時は、何時も中畑家へ飛んで行つては、融通を頼んで居た。すると得助も快よく何時も其願ひを聞いてくれた。然るに此事があつてから、政太郎は中畑家の鬨を大層高く感じて、今迄の様に手軽に飛んで行く事は出来ない様に思つた。少し計りの不都合や不便は忍んでも成るべく中畑に迷惑を掛けぬ様にした。然し愈々都合の付かなくなつた時には、政太郎は詮方なく中畑家の鬨を跨ぐのであるが、得助は以前ほど快く貸して呉れず、三度に一度ぐらゐは情なく跳ね付けられる事さへあつた。政太郎は止むを得ず、神宮寺の門に走つた。すると神宮寺は例の義侠の性分から、屹度何とか都合をしてくれた。

川上政太郎の方へ融通を避る様になつてから、中畑得助は別の方面へ其資本を働かせる事になつた。別の方面と云ふのは、同じ村で川上と同じ職

屋を營んで居る織本清六と云ふ若い男である。清六は髪を真中から奇麗に分けて油をコテ／＼塗つて、折々は薄化粧さへして居る氣障なハイカラ野郎で、多辯で、オッチョコチヨイで、常に得助の鼻息を窺つては胡摩を擦つて、得助から資本を引出して業務を擴張した。そのお蔭で今では工女の三十人も使つて居るのである。商賣忌み敵と昔しから言つた通り、織本は平素川上のやり口を小面憎く思つて、何時かは彼を仆さずんば止まじどの考へを持つて居た。川上と中畑との仲の圓滑に行かぬのを見て取つた織本は雀躍して、時機到着せりと喜んだのである。

五 生命同様に秘藏の土地

庭に面した座敷に茶を啜りながら對座して先程から、頻りに密々話をし居るのは、主人中畑得助と、織本清六である。清六は額に垂れ掛る長い髪を右の手で女の様に掻き上げながら、

「どうも實際危険千萬ですよ。川上さんの送つてる店は此前も手形の不渡

を出して、既での事に刑事問題にならうとしたのを、漸と同業者で救済して無事に済んだのですが、今度は逆も治まらずまい。すると差當り影響を受けるのは川上さんで、送つた品の代金は到底取れる見込が無いのですから軽く行つても大損害は免れんど云ふ事は、よく見えて居りますからね。貴下も此際餘程お氣をお付けなすつて、一切川上さんには融通を爲さらん様に、又是れまで融通してあるものは早く回収を爲さいませんと、飛んだ災難に逢ふまいものでも無いと存じますか……」

「うむ、川上の恩知らず奴がそれでは、到頭そんな破目になりましたかいナニ佛の顔も三度でさア、もう彼奴の言ふ事は聞かないから大丈夫ですよ。」
「それにしても、是れからの御用心だけちや追付きませぬ。彼の事が愈々大事になつたら、川上さんは家に在る織機道具まで差押へを食ふかも知れんのですから。」

「可いよ。實は私にも疾うから考へがあるんだがね。」
「お考へと云ふと……」

「實は舍弟に今度新家を建て、やらなくちやならないのさ。處が新規に建てるどすると、如何粗末なものを拵らえるとした處で、五百や六百の金は消えて了ふ。處で色々考へて見ると、何も思知らずの川上なんかは彼アして家を貸しどく事はない。セチ辛い今の世の中に、家賃だつて碌だま拂つて寄越さない家を貸しどくのは、詰らない事だと思ふんだ。それで、川上を追出して、其處を舍弟に呉れてやらうと此う思つてるんで……」

「そ、それが可いのです。そりやア名案だ。そうして取る物は取つて……」
丁度その時、噂をすれば影どやら、川上政太郎が得助を訪れた。織本清六は首を縮めて、

「それでは又……」
と、裏口からコソコソと逃げる様にして歸つて行つた。

引違ひに、政太郎は得助の前に低く頭を下げて、
「如何も御無沙汰致しました。つい退引ならぬ取引先の用事があつて、其

方へ行つて居つたものですから。」

得助は莞爾な晴々しい顔をして政太郎をサモ快げに迎へるのである。

「如何だね、近頃の景氣は？」

「如何も仕方の無い事になつて了ひました。」

「不景氣と云ふんだね。」

「え、不景氣も不景氣、頓ど荷が動かないので弱り切つて了ひます。資本は固定して了ふ、出した物の代は回収が出来ませす……」

「然し君近頃は大分優勢だと見えて、金が入用だなんて言つて來ない位だから、結構ぢや無いか。」

政太郎は苦笑して、
「如何して、そんな譯ぢや無いんですよ。實は今日はそれに就いて御助力を願ひたいと思つて……」

「それは冗談だらう、君の勢ひぢや……實は此方から少し融通して貰はうかと思つて居つたんだ。」

「そんな不氣な冗談どこぢや無いんです。眞に私は四苦八苦の困難に陥つて居るんです。」

「困難?。」

「然です。此う云ふ譯なんです。清水の例の取引先で先達て三千圓の手形を振出したのです。で、今まで例も習慣になつて居るんで、私し裏書をして呉れツて言ふんです。私も何の氣なしに裏書をしてやつた處が、期限になつて支拂が出来ないと云ふ始末なんです。で、責任が當然私の處へ來たので、私も始終取引する御得意ぢやあるし、力に及ぶ事なら如何にかしてやりたいと思ふのですが、不景氣の今日ぢや、如何にも方法が無いのです。それで若しや貴下にお願ひしたら、御心配を願つて一時の急場を凌ぐ事が出来るかと、甚だ鐵面しいですが、實は其お願ひに上つたのですが……」

政太郎はホツと太息を吐いて得助の顔色を窺つた。得助は嘲ける様に、

「それは實にお氣の毒な事だねえ。けれども私も此頃では手許が不如意で、如何ともする事が出来ない。」

「でも御座いませうが、私に取つては九死一生の場合なんですから、お聞濟み下さるなら、僅かではありますけれど擔保も入れますが。」

「擔保? 擔保ツて織機でも。」

「いゝえ郷里に先祖から傳はつてる山林があるんです。千圓ぐらゐの價値は有らうと思ひます。」

得助は妙な目をして、

「その地所の事は今迄君は私に話さなかつたねえ。」

「え、之は父が死ぬ際に決して他人の手に渡してはならぬぞと呉々言つて置かれたので、成るたけなら利用したくないと思つて、それでお話もしなかつた譯です。それに之が私の最後の準備なんで、之を亡くして了ふと、私は裸一貫になつて了ふのですから、之は私の生命同様に秘藏して居たんです。で如何でせう、私し此際に腹は換へられませんから、之を擔保と致す決心ですが、之で三千圓の御用立を願ふ譯には參りますまいか。」

得助は黙つて何か深く考へて居たが、

「そりや君、昔の私なら三千圓位は用立て、用立てられん事も無いが、今
ぢや一圓の金も難かしいね。」

「一圓の金も？」
と、政太郎は思はず目を睨つた。

六 破産

「然です、一圓の金も到底御用立てする譯に行かん。」

「行かんと仰言るとそれ迄ですが、實際それが出来んど、私は破産する外
は無いです。破産すると私は如何でも可いとして、第一に出資者たる貴
下に御迷惑を掛ける事になる。第二に永安社の諸君にも御迷惑を掛けなけ
ればならない事になります。永安社の規則に従つて非常救済と云ふ様な事
をして頂かなければならない。私はそれが實に心苦しいのです。」

「それは私も困るです。困るけれども實際出来ないのでから……出来ない
計りぢや無い、私は今度舍弟を別家させなくてはならないので、如何して

も君から切めて半金……千圓だけでも返して貰つて、
急場の工風を付けなければならぬのだ。」

「こ、此際返せと仰言るのですか。」

政太郎の聲は驚きに少し顫へを帯びて居た。

「どうも然して貰はんど、私も實に困る。」

「と云つて、私の手には今一文も無いのですから……」

「君ぐらゐにして居る人で、一文も無いと云ふ道理は無い。」

「いや實際無い……有る位なら破産しなくちやならないなんて心配する必
要は無いのです。」

破産？川上政太郎は、最後の望みとして居た中畑から斯く見離された以
上、もう破産は到底免れぬ彼の運命なのである。其友の爲めに盡して、圖
らずも斯かる奇禍を招いた彼は、又友の情けに依つて此難關を切抜けよう
としたのであるが、不信なる彼の友中畑得助は、冷然として彼を見殺しに
しようと思ふのである。普通の人ならば

「え、もう頼まぬ。如何とでも勝手にしやがれ。」

位々の捨鉢の荒い言葉を残して、憤然として辭し去る可きであるが、信義に敦い政太郎は、決してそんな亂暴な事をする男では無かつた。

悄然として頭を上げた彼の面には、既に斷然たる決心が現はれて居た。

「中畑さん、貴下に然う見離されて見ると、私の運命はモウ決つて了つたのです。此上は私は座して、破産の宣告を待つより外に途が無いです。就きましては……」

政太郎の聲は悲しい濕つぱい響きを傳へて、唯見る蒼い其頬の邊りを紅涙一二滴徐かに傳はり落ちるのである。

「就きましては、今まで長年お世話になりましたもの、遂に其御恩を報ずる事も出来ず、誠に心苦しい次第です。が、私は此破産の大打撃も數年ならずして必らず挽回する覺悟であります。そして拜借の資本金も其時こそ御返却を致す決心です。それで今破産になると、私の持つて居る機織道具や工場の物一切も差押へられて了ひます。すれば私の營業も出来なくな

つて、私はモウ御恩を報ずる事が出来なくなる計りで無く、其日から路頭に迷はねばならぬ事になります。」

「私の名前に書き換へて置かう。」

と、突然中畑が言ひ出した。

「然です。然願つて切めて營業の繼續の出来る様にして頂くです。そして何うせ破産となれば地所だつて人に取られるものですから、これも貴下のお名前に書換へる事に致しませう。すれば拜借の資本に對しても大きに私の義務が立つと云ふものですから。」

「ぢや然うして貰つときませう。早速登記するだね。」

「登記ですか。」

「あア登記を。」

政太郎は喜ばしげな得助の態度を流石に不愉快げに、

「登記なら明日にも清水の登記所へ参りませうよ。」

「明日なら私も都合が好い。」

政太郎は窓を開けてベツと庭へ唾を吐きつけ乍ら。

「それからお宅の倉庫へお預け申してあるアノ織物ですな。あれは神宮寺さんへ擔保にやる事にしました。」

「神宮寺に？」

得助はサモつまらぬと云つた風に、

「神宮寺の用立は幾らでも無からうに。」

「いゝえ、貴下の半額ぐらゐは有るんです。けれども神宮寺さんは情け深い方でね、擔保は五分の一にも足りないで承知して下さつたですよ。」

「ふん、然ですか。そりや何より結構な事だ。」

と、得助は憎々しげに鼻で笑つた。

「で今日神宮寺さんの方へ送りますから、それを御承知願つて置きます。」

「そりや勝手になさるが可いでせう。」

政太郎は絶望して我家に歸つて行つた。

七 妻や此家で死にたい

土地も工場の機械も製品も、義理ある債務に向けて、今は無一物になつた川上政太郎は、差押も競賣も、乃至破産も、最早恐るゝ處では無いと、妻や忬夫婦たちと、一心に其日々の仕事に従事して居た。

五日ばかり経つた或朝、中畑得助はプラリと政太郎の家へやつて来た。

丁度工場の手傳をして居た政太郎の妻およしは、急ぎ出迎へて、

「相變らず取散らして居ますが、何卒お上りなさいまして。」

と、莞爾に挨拶した。

「いや然しちや居られないので、一寸川上さんにお目に掛りたいと思つて来たのですが、お出ですか。」

と、得助は上がり端に腰を下ろした。

「宅では今朝程用足しに出まして、未だ歸つて参りませぬのですが……」

「然ですか。」

ど、得助は暫時打案じたおよしは、心許なさそうな色をして、

「何で御座いますか……伺つて置いて宜しい様な事で御座んしたら。」

其處に十八になる嫁のお松が初々しい羞耻を見せ乍ら、襟を外して、

やかにお茶を汲んで来た。淑

「あ、有難う御座います。」

ど、茶碗を受取つた得助は、ジロリとお松の銀杏返しに目を落して、

「正助さんはお出でなさるでせう。」

「は、唯今呼ばせますです。」

ど、およしはお松の方を向いて、

「ではね、お前一寸裏へ行つて——何か今向ふでして居た様だから——旦那様がお見えになつたから急いで来る様につてね。」

「は、」

ど、お松は立つて行つた。およしは得助の面色の今日は何時になく曇り勝ちなのに、轟く胸を推鎮めながら、

「旦那様、この頃中は宅で色々な御無理をお願い申したそうで御座んして誠に如何も……」

「は、」

得助は木で鼻擦つた様な挨拶をして黙り込んだ。そこへ政太郎を小さくした様な正助が、若い妻に伴はれて裏から現はれた。正助は低く腰を屈めて、

「何卒お上り下さいました。」

ど、下駄を脱いで上つた。

「いや然しちや居られないので。實は少しお願ひがあつて上つたのですがね。」

「は、」

正助も不安に感じたが、母のおよしと顔見合せて、ジツと得助の言葉を待つて居る。

「色々な考へて見たが、結句萬止むを得ない事情があるので……誠にお氣

の毒ではあるが。」

得助は此う云つて言葉を切つて 正助たちの思はくを見て、

「實際こんな事を言ふのはお氣の毒でならんだけけれども……」

「はい、どう云ふ事で御座んすか。」

およしの瞳が先づ動いた。

「俺の處で舎弟に今度別家をさせる事になつたので。」

「はい成程。」

「それに就いちやア色々金が掛かる。地所も分けてやらにやならず、それ

から家も建てしやらにやならないと云ふ始末で……」

「御尤もです。」

と、正助は唾を飲んだ。

「それでね、平素なら夫も大した事ぢや無いのだから介意やしないが、

しろ此う云ふ不景氣の時だからね。それで先づ出来るだけ儉約にして、

の掛らない工風をしたいと思ふだが……」

金何

「如何にも。」

「それに就いちやア一つ折入つてお依頼があるのです。」

「そりや私どもに出来ませ事なら。」

「外でも無い。此家を明けて貰ひたいと思ふんです。」

「え、明けるも仰言ると？」

「つまり家を返して貰ひたいのです。」

「家を返して？すると妾共に立退けと仰言るので御座んすか。」

およしは驚きの聲を揚げて叫んだ。

「つまり然ですな。」

と、得助は冷然として答へた。正助は呆れて物をすら言ひ得ない。

「然すると妾たちは何處へ行くんで御座んせう。」

と、およしは最う半ば泣きながら訴へる様に叫ぶのだ。

先程から店の室の隣りの室で、機織の絲屑を氣永く繋いで居た正助の祖

母おそのは、八十九と云ふ皺だらけの面を此時障子から出して、得助の方

へにじり進んだ。

「旦那様、この婆にも一言云はして下さりませ。貴下さんは御存知でも御座らつしやるまいが、前の大旦那様と妾の配偶とは、親身も及ばぬ仲よしで、此うして茲にお世話になつた時も、此家を建て下すつて、家はお前にやるど仰言つたいけれども、配偶も根が一刻な堅人なので、それじや有難すぎて勿體ないど、ヤイ〜大旦那様の言つて下さるのを、無理やりに借家と云ふ事にして、毎年家賃を納めて来たので御座ります。四十年と云ふもの家賃を納めりや大抵の家は建てても損は無い筈ぢや御座んすまいかのう旦那様、どうかお情けで御座ります。この家だけは取上げるなんと仰言らないで下さりませ。」

老母は涙に聲を曇らせて掻口説いた。

「さア俺も此んな事を言ひたくもないが……」

「何か政太郎がお氣に障る様な事でも言つて、それで俄かのお話して御座ると、苦り切つた得助の言葉に、

んすなど、此婆が幾重にもお詫を申しますので……」

「だがお婆さん、如何も此事は私の都合が悪いでな。」

「後生一生の願ひで御座ります。そんな事を仰言らずに……」

「如何も困るよ。」

「ど云つて、妾も最う先の長い身でも御座んせんから、何卒此家で死なせてお貰ひ申したう御座んす。旦那様、この婆の心にもなつてお察しなされて下さりませ。のう、旦那様お願いで御座ります。」

得助は顔を反向け、

「如何も然云ふ都合に行かないね。」

「行かなるどて旦那様、これが貧乏人の貴下ぢや無し。」

「いゝえ、貧乏になつたよ。」

「それぢや如何あつても。」

「あゝ。」

おそのは老の目に一杯の涙を溜めて、

「そ、そんならば宜しう御座ります。さ、店立でも何でも成されて下さりませ。婆は一寸でも動きはしませぬ。如何せ追い出されて路頭に迷つて渴ゑ死にする位なら、妾や此家から死骸になつて出て行きます。さ、切るとも突くとも御存分になさりませ。婆の目の黒い内は此處一寸でも動く事では御座んせぬ。」

黄いろく色澤を失つた老母の頬には、熱い涙が二行三行傳はつて、齒の無い唇を噛みメめた口元には、決心の色が漂よつて居る。

「ま、ま、祖母さん、そ、そんな事を云ふものぢや無い。」

と、正助は悲憤に燃えた面を擧げて、

「兎に角親父の歸るまでお返事をお待ち願ひます。」

「ぢや然云ふ事に。」

と、出て行く後姿を見送つて。老母は、

「妾や此家で死にたい。」

と、其場に突伏して泣き入つて。およしもお松も正助さへも、慰め兼ねて

共に不覺の涙に暮れて居た。

八 無法な人間になつたのだ

程なく父の政太郎が歸つて來たので、一同は涙乍らに事の次第を物語つた。政太郎は一什一伍を聞終つて、

「地所も先方の名に書換へて、あれ程までにしてあるものを、畜生ッ、情しらすの義理知らず奴、そんな沒義道な事をしやがるか。」

と、思はず拳を握つたが、流石は分別盛りの男だけに、待てよと暫し思案して、神宮寺勇の宅へ、何とか盡力を頼んで見ようと出掛けたのである。

神宮寺は固より俠義に富んだ人であるから、政太郎の困難に太く同情して、直ぐ用事を差繰つて中畑の處へ行つてくれた。

「同じ永安社の社員で、然云ふ事があると、世間への聞こえも如何あらうかと思ふのですが、此處は一つ篤くりお考へになつて頂かんと困る事になりはしないのでせうか。殊に副社長の貴下が平社員の川上さんに無情な事を

したとすると、畢竟此社の名譽が下がつて、其上に相互救助と云ふ根本精神に疑ひが生じると云ふ次第になる。そればかりで無く、今貴下が川上さんの住宅を取上げて了つたら、其結果は如何なるでせう。川上さん一家は全く行く處が無くなるでせう。爲る仕事が無くなるでせう。すればモウ關はないから、勝手に死ねと云ふのも全様になるぢやありませんか。然云ふ慘酷な事は決して貴下に出來るもんぢや無からうと思ふんです。それが假令出來るにした處で、永安社としては社員を見殺しにする譯には行かないのですから、是非それを救はなければならぬ。すると貴下は一方で殺して一方では貴下の出資金を使つて之を生かすと云ふ、實にくだらぬ結果になるのです。貴下が思ひ返へして下されば、そんな結らん事もせず済むと云ふものですから、此處は十分熟考して頂かなくては。」

と、情理を盡した神宮寺の言葉に、流石無情の中畑も今更抗辯する口實も見付からなかつたので、

「それではマア川上は彼アして置いてやりませう。」

と、中畑は澁々ながら答へるのであつた。

「そうしたら川上君は何の位い喜ぶか知れませんか。」

と、神宮寺は我が盡力甲斐のあつたのを喜んで、家に歸つた。

家に歸つて一服すると、中畑から使が追驅けて來て一封の書面を勇に渡した。急いで封を切つて見ると、それは意外にも中畑得助の永安社脱會届であつた。

意外の處置に神宮寺はハタと當惑した。如何言ふ理由で中畑は脱會など云ふ氣を起したのであらうか、篤とそれを聞訊した上で、何とか彼の考へを翻へす様に説得しなければならぬと、神宮寺は又その足で中畑を訪ねて色々聞いて見た。

「神宮寺さん、私はそう云ふ男になつたのですから、惡からず思つて下さ。」

と、中畑は平氣な顔をして居たので、神宮寺はヤキモキしながら、

「それぢや餘まり亂暴ぢやありませんか。何とか理由を仰言つて下さらな。」

けりやア……社長としての私の處方に御不満の點があるなら、それを仰言つて頂いて私も反省したい。ね、何卒お願ひですから御腹藏の無い處を一つ言つて頂きたいものです。」

「いや決して貴下に不満の何のど云ふ様な事ぢや無い。私は全く理由も何も無い其様な無法な人間になつたのですから。」

中畑は何と云つても是れ以上には物を言はないので、神宮寺もトウ／＼負けて辭し歸つた。そして永安社の爲めに重要な中畑副社長が退社とまでに決心したのは、餘程深い理由があるに相違ない、が不徳なる自分には到底この解決をする事が出来ないからと云ふので、中畑の退社届に加へて、自分の辭任届を理事の筒井亦助に送つた。神宮寺は役員を止めて唯だの社員になつて永安社の爲めに盡す決心をしたのである。

永安社の創立に主動社となつた二人が二人とも責任を遁れる様では、社の運命と云ふものも知れたものであると、此届書を受取つた筒井は大に驚いた。そして之も中畑や神宮寺に説いて思ひ止まらせようとしたが、それ

は到底出来る事では無かつた。筒井は止むなく規則に依つて評議員會を召集した。

評議員會は席上で、其評議員の一人たる織本清六は、盛に駄辯を揮つて次の様な議論をした。

「永安社と云ふものは神宮寺、中畑の二人で持つて居たので、外の社員は二人の勧めに従つて入社したのであるから、二人が無ければモウ社は生命が無いのだ。その中畑さんが退社なされると云ふのは、よく／＼深い仔細がある様に思はれるみのならず。神宮寺さんが責任の地位を退いて了はれるとになると、父母に置き去りにされた子供同様、とてもモウ社は成立たないと思ふ。つまり此末が思ひやられる。これは一日も早く——餘り失敗などを見ない先に——社を解散して了ふ方が得策だと信ずるのだが……」

朴訥な農夫たちを會員にして居る評議員會の人たちは、此の織本の議論の向ふに廻る辯口の者は一人も居なかつた。見す／＼議は遂に解散に決した。無能な理事の力では、狂瀾の如き此大勢を既倒に廻らす事などは、思

ひも寄らなかつた。

續いて總會が開かれて、解散は合法的に事實になつて了つた。此の報を聞いた神宮寺は愕然として思はず持つてた煙管を取落したが、やがて愁然として天を仰いで嘆息した。

『あゝ生れて僅か三年足すの内に此様な事が起らうとは思ひも寄らなかつたが、之も運なり命なりであらう。六十個年計畫で四十人の社員を各々一家一萬圓の資産家にしようと思つた初めの望みも、僅か三年で毀れて了はうとは、あゝ人の和と云ふものは難かしいものである。四十人の内に一人か二人の野心家があると、それで組合は見る影も無く突崩されて了うのだ。一萬圓は愚か百圓の財産も拵らへる機會はモウ永遠に村の人の上に来る時はあるまい。貧村は何時までも貧村であり、貧民は永劫に貧民で居なければならぬのが、浮世の常法であらうか。いや、いや、それは憎むべき悪魔の呪ひである。福利を私せんとする短見蒙昧なる富者の我儘である。自分分は飽くまで此風潮と戦つて、可憐な人々を不幸から救ひ出さねばならぬ。』

神宮寺巧は其一二點霜を交へた髪のを兩手に掴んで、憤然と立上つた。

九 平家の落武者の如く

翌日川上政太郎は改めて中畑から立退を命せられた。

政太郎の經營して居る織屋に在つた限りの財産は、機道具と言はず、染場と言はず、絲類と言はず、既に借金の抵當として讓渡すと云ふ證文が中畑の手に渡つて居た。中畑の倉庫に預け入れてあつた製品全部は、四五日前借り金の抵當に神宮寺や筒井の倉庫に搬び去られて了つて居た。政太郎の手に残つて居るのは、七八人の女工に拂はねばならぬ工賃と、三千圓の手形裏書の債務のみであつた。神宮寺にも此上の厄介は掛けられぬ。中畑に泣付いても無益である。川上は兎にも角にも此無情の村を一物の所持品も無く、四十年前に流れて來た時と同じ様な姿で立退くより外仕方ない運命に陥つた。それも切めて故郷に地所の半片も残つて居たならば、然うしたミジメな運命に翻弄されずとも、又取付く望みもあつたらうが、

其唯一の頼みであつた地所すら、今は恨み重なる中畑の名前になつた了つたのである。

愈々退立かねばならぬ事になつた時、親子五人が皆聲を放つて泣いた。殊に八十九歳になる母のおそのは、狂せんばかりに、

「妾は此家で死にたい。世間へ行つて路頭に迷つて人の物笑ひになるよりか、妾や如何しても此家で死ぬ。」

と、泣き叫んで聞かないのである。ともすれば首も縊り兼ねまじき血相に、政太郎夫婦は勿論の事、孫の正助夫婦も、様々に老人を言ひ慰めるのであつた。

政太郎は神宮寺の納屋を一先づ借りて、其處へ立退く事にした。工女たちは流石に昔の好みを忘れずに、日當も拂へぬ川上の引越の手傳をして半日働いてくれた。遠くもあらぬ神宮寺の家へ、荷物を三時頃から搬び始めて、荷車の幾回か行返りする内に、何時しか日が暮れて、春の夜は臙ろに匂ふ薄霞みの上に、ボンヤリと上弦の月が出た。一車また積み終つた政太

郎は、

「さア之で愈々お仕舞です。老母さん、さア出掛けるどしませう。」

妻のおよしは吊してあつた洋燈を自在から外して灯の點いたなり手に提げた。老母はおよしの影で暗くなつた室の中を見結めながら、

「政太郎、妾や如何しても此家で死ぬ。お前等は行つておくれ。アレ父さんが闇の中に……アレ迎ひに来てくれた。」

と、次第に蔓る内外の闇を透かして叫ぶのである。

「ば……馬鹿な事を。老母さん、そんな事を言つちや私が困るぢやありませんか。なアに時世時節で、生命さへありや又畜生どもを見返してやる時にも來ますよ。さア老母さん、そんな事云はずと出掛けませう。段々遅くなつて正助等も向ふで待つてませうから。」

政太郎は無理に老母の手を取つた。

月は仄かに道を照らして。先に行く車は夢の様にスイ〜と何處までも逃げて行く様に見える。何物にか追はれる様に見返り勝ちに、平家の落武

者の都を落ち延びる如く、聲を呑んで悄然と田舎道を辿る三人の姿は、影なりと見れば影あるが如く、影なしと見れば影なきが如く、此世の人か將た冥の國の人かを疑はしめるのである。

三六〇

我一人の力。能く何を為さんと云ふは自ら悔るなり、今日民意の銷沈は人各々自ら悔るより來れり。人は世何事か一人の力に出でざる、國家の強きは一人の強き集まれるなり、若し我力の微を顧み、結果の擧らざる可を豫想して起たずして止むは、怯者の事なり、今の世の滔々たる不合理は人々の怯より來れること無き。余は唯だ人事を盡して天命を待つしの教を奉ず、爲すは人に在り、成るは天に在り、成る成らざるは知らず先ず爲すを要す、爲す無きは成る無きなり、爲して成らざるも何ぞ恐れん、恐る可きは我の爲さるるに在るのみ。余は結果を知らず、結果が余を福するか我を禍するか、蓋し身の爲に計る者は禍福に屈托するを要す、世の爲めに計る場合に、禍福に屈托するは、則ち野心あるなり、野心は多く事を誤る、今の滔々たる不合理は世の爲めに圖る人が野心を絶ち得ざるより來るを多しとす、(中略) 則ち不合理なる一切と戦へる一語を以て、絶す香々の心中に叱咤せる天命の聲と爲さん。命を信じて猛進す、余の覺悟は單に是なり。

(黒岩涙香)

みづからを卑く蔑むあさましき

習ひをいつか我作りけん。

松影

第十二章

一 桑葉の不足

大字は大字同士で争ひ、一つ区内の人達さへも敵味方に分れて鎬を削つて居る。學校併合問題は、それからそれと果てしも無い争ひの種子を明星村に播いて、人の息の根が止まるか問題が終結するか、前途何れとも見極めも付かぬ場合に立至つた。此間に信託會社の明星村支店は、更に村民の心付かぬ中に又一つの手を擧げた。それは桑畑の買占である。隣りの花澤村の桑畑は一つ残らず會社に買取られて了つて、明星村の農家が春蠶を飼はうとする時には、モウ桑葉は一枚も他人から買入れる事は出来なくなつて居た。いや買ふ事が出来ないのでは無いが、其値段が恐ろしく高くなつて居て、到底それを買つたのでは、收支の勘定が合はないのであつた。明星村で蠶を飼ふ事は一番春日が盛んであつた。その外の區でも飼ふ家

はあつたが、春日ほど澤山に春蠶から秋蠶まで續けて飼ふ家は澤山無かつた。それで村内の桑畑と云ふものは、春日には多少あつたが、その村は春日自身の養蠶にも引足りない位で、其外の分は今迄皆な花澤村から買入れて飼つて居たのである。

それで明星村の養蠶家たちは、花澤村の廣い桑畑が一時に信託會社に買収されて了つたので大恐慌を起し、一二の人は逆も今年は飼つた處で駄目だと云つて、毛蠶を河に投げ棄てる氣早やの人も現はれた。けれども大部分の人は花澤村の畑主に談判して、信託會社とも賣約を取消して此方へ桑葉を賣らせようと云ふ事に相談一決して、總代を選んで花澤村の桑畑主の處へ交渉に行かせた。處が畑主の答へは大層冷淡で、

明星村でさへ會社に地所を賣つたでは無いか。自分の事を棚に擧げて他の事を責めるとは、身勝手過ぎた話である。と、答へるのであつた。

其内に蠶は愈よ大きくなつて、食べ盛るので、桑は明星村に不足を告げ

て來た。それでも花澤村では一向平氣で居た。

明星村では仕方が無いので、遠い處から桑葉の輸入を企てた。すると會社では俄かに桑葉の運賃を高くして、その輸入をも妨げた。三眠を起きた蠶は、全村擧つて捨てるか、それとも花澤村か會社を襲つて桑葉を掠奪して來るか、二つに一つの道を取るより外なき悲境に沈んだ。

明星村は今や全く無政府である。村長の辭職以來、助役が村長の代理を務めて居るけれども、一村の秩序を維持して行く様な人望も手腕も無いので、手綱を離れた若駒の如く、村民は何でもやりたい放題の事をした。學校の合併派と非合併派は益々軋轢して、毎日の様に殴り合ひや怪我人が出來た。それで此の桑葉の不足が出來ると、殺氣立つて居る村民たちは、大擧花澤村を襲うて、桑畑を蹂躪しようとする亂暴な議論が多數を占めて居た。其儘にして置けば、如何なる慘劇が演ぜられるかも知れないと云ふ慮れがあつた。

明星村では遂に村會を開いて、花澤村に正式の交渉をして其反省を促が

す事になつた。若しそれでも花澤村が應じなかつたならば、花澤村から明星小學校へ委託されて居る二十名の生徒を拒絶すると云ふのである。この二十名の生徒は、表面の理由は花澤本村の學校へ通ふより明星小學校へ通つた方が距離が近いからと云ふので教育を委託されたものであるが、實は明星村の朝日に近く花澤村の一端に宇田中と云つて特殊部落、早く言へば穢多村の一部落があるので、其處の子供をば花澤本村で嫌つて、若干の費用を出して明星村の學校へ頼んであるのである。

二 非買同盟

驚き起つたのは花澤村の田中の一部落である。本村から排斥せられて、やつと血路を朝日の小學校に見付けて居るのに、今こゝで明星小學校を排斥されたのでは、小供を學ばせる學校が無い。罪も無い二十名の兒童は明日から其方向に迷はなければならないのである。團結力の強い、自我の念の發達した。そして普通の村人に比べて遙かに教育の普及つて居る。此部

落の人達が、如何して之を黙つて居られよう、或者は鋏を投げ捨て、或者は牛切庖丁を額にして、或者は靴や雪駄の製造を抛り出して、或者は麻裏草履製造の暇を潰して、續々と花澤村役場に陳情に及んだ。何卒明星の言ひ分を通して貰ひたい、さも無ければ吾々の子弟を本村の小學校に入れて貰ひたいと云ふのである。花澤村長も村會議員も、田中の此運動には大に避易した。

花澤村は遂に明星村の交渉を容れる事になつて、信託會社へ桑畑の買戻しを懇請した。すると意外にも會社は一言の下に其請求を刎ね付けて了つた。花澤村民は更に手を換へて會社へ迫つたけれども、會社は頑として其要求を容れないのである。花澤村民は詮方なく此趣きを明星村に回答した。學校問題やら、村治の事やら、租税滞納處分の事やら、會社の専務やら種々雑多の難問題が頭の上に押被さつて、さらでもイラ／＼して居る明星村の輿論は、一も二も無く花澤村の回答を受取ると同時に煮えくり返る様に沸立つた。村民や村政を屁とも思はぬ會社の仕打を心底から、憎いと思

はずには居られなかつた。

「如何して呉れよう。」

「如何して呉れよう。餘まりな事をしやアがる！」

と、村民の血潮は徒らに沸騰する許りであつた。殊に青年會の連中は血氣の口角に泡を飛ばして、

「落合を殴れ、落合を殴るより外に手段は無い。」

と、口から口に反響した。明星村青年會長草村文平は、會員の實の無い空騒を憂へて、或日會の集會を催はして、此際に處すべき心得を懇ろに説き示したのである。

草村の言ふ處に依ると、此際村民の採るべき途は唯一つしか無い。憤然立つて會社と戦ふのである。會社を打倒すまで戦ふのである。而も其戰爭は飽くまで立憲的文明的であらねばならぬ。苟くも腕力に訴へたり、卑劣無法なる暴舉に出づる事なく、正々堂々、正義の手段に依つて決戦すべきである。而して吾々の武器としては唯だ團結の勢力、それに依つて會社を

反省させるより外に手段は無いのである。願はくは我が青年會を打つて一團としよう。青年會が團結が堅く出来たならば、次には村民全部の結合を得よう。學校問題などで支離滅裂の村民も、此會社てふ共同の敵に當るに際しては、必ずや一致の行動に出づべく、又絶対に共同せねばならぬ事である。既に村民を打つて一丸とする事が出来たならば、次には進んで花澤村に交渉して一致の行動に出て貰はう。この勢力を以て會社に反省を促がしたならば、會社如何に頑迷と雖も、よも吾々の希望を容れぬ事はあるまい。桑畑の買占を解く位ゐの事は朝飯前の事である。而も若し不幸にして會社が反省せぬならば、吾々は止む事を得ず、最後の手段に出でねばならぬ。最後の手段とは、會社に對するボイコットである。非買同盟である。吾々は決して會社の鐵道に乗らぬ事にしよう。如何様に不便を忍んでも之に乗らぬ事にしよう。吾々は決して會社の店から物を買はぬ事としよう。近くは平山村、遠くは清水市に行つて買物をして、會社の品物は一物たりとも買はぬのである。而して又吾々は、會社が千金を積み萬金を供すると

も決して卵一つでも會社の奴に賣つてはならぬ。然したら會社の營業は全く止まつて了ふのであるから、如何ほど頑迷不靈の會社でも、恐らく反省せずには居られぬであらう。我が青年會員たるものは自重自愛、輕舉盲動を戒めて、村民の指導者となり、以て此の一大運動を成功せしめて、村治上に貢献する處が無くてはならぬ。

草村は右の意見を丁寧にして、會員を激勵した。數百の會員は固より草村の崇拜者であるから、首領の諭告に感激の涙を流して、誓つて此敵を驅逐し終らざるば止まざるべしとの決心を爲した。

會員は其日から手を別けて八方に奔走した。元より村内で一番教育のあつたのは青年である。一番仕事の出來るのは青年である。而も其青年たちは何れも村民の最愛の子や弟であるのであるから、村民は此熱誠溢るる青年の運動に满腔の同情を寄せた。同意書の調印は五十人百人と瞬く内に村民全體を網羅して了つた。青年は更に隣村の花澤に趨つて、事の顛末を説いて其同意と調印とを促した。多數の村民は同じく喜んで之に調印した。

結束は成つた。明星村青年會は帝國信託株式會社明星支店に對して非買同盟を宣言した。

三 明日の百より今日の五十

明星驛から會社の輕便鐵道に乗る者は一人も無くなつた。中には乗りたと思ふ者があつても、驛の近邊へ出て見張りをして居る青年を憚かつて乗るのを躊躇した。止むを得ぬ足弱や女小供は夕月驛を通り越して平山驛まで行つて、其處からそつと乗つた。平山までも歩けぬものは大抵は他出を見合はせた。明星の村の人は青年に顔を見知られて居るので、歸りにも大概平山で降りて、明星驛まで乗つて來る者は無かつた。

會社の賣店は忽ちにして門前雀羅を張る有様になつた。呉服の類は、村人は出來るだけ遣繰をして新調を延ばした。化粧品も有るだけを用つて、それが無くなるまで次の分は成るだけ延ばして我慢して居た。齒磨の代りは鹽を用ひた。洗粉の代りには糠を使つた。味噌が缺乏すると味噌汁は

止して醬油汁にした。醬油や鹽や米麥の様な、生活に無くてならぬものは、青年會員の手で馬力を雇つて清水市から搬んで來た。

初め一週間ばかりの内は、人民は非常の敵愾心を燃やして、會社を叩き潰さなくては措かぬと、盛んな意氣込みをして居たが、其内に次第に缺乏と不自由が村民の腹の底へ浸み込んで來た。多くの養鶏家は卵の生んだのを擁へて其の捌口に困つて居た。養蠶家は上簇り掛つた蠶を目の前に控へて、繭の買手の來らぬのを苦し始めた。そして之を賣るためには、どの家でも遙々清水市まで出掛けなくてはならぬ。會社の出來ぬ前は仲買人が多勢這入り來んだものであるが、會社が出來てからと云ふものは、仲買人が來ても到底目星しい買物をする見込が無いので、誰も來ぬ様になつて了つたのである。さればと云つて、青年會では市場の經驗が無いので、之を町に持つて行つて賣ると云ふ手段は、講じられなかつた。仕方が無いので、今一二週間もすれば此事件が落着するから、それ迄辛棒して待つて居る様に、賺したり宥めたり勵ましたりするのには、青年會員は骨を折つたけれど、

ども其内に卵は陽氣の爲めに古くなつて、中には腐敗する者すら出來て來た。

會社で買ふ時には色々の日用品は、借りて買ふ事が出來たものであるが、青年會で賣る様になつてからは、會に資本が足らぬので、一切貸賣と云ふ事をしなくなつた。金の入る時に決りのある買家に取つては、これは甚だ便利では無かつた。

其内に會社は輕鐵の旅客賃金を臨時に値下げして、平山明星間は誰でも無賃同様の金で乗らせる事にした。この時は青年會ではソウ何時までも停車場の見張りも出來ぬので、それを止めて居たので、花澤村の人は勿論、村の人でもポツ／＼明星驛から隠れ乗りする人が出來た。

それから會社では米穀雜貨を以前よりも三割方値下げして賣出した。始めは青年會の人たちの手前を憚かつて、誰も買ひに行く人は無かつたが、それでも夜や見て居らぬ時を覗つてチヨイ／＼抜け買ひに行く人が出來た。それらの人は會社が望みに任せて幾らでも貸してくれるのを大變重寶がつ

た。のみならず、三割も安いと云ふ事が、道理の餘りよく分らぬ村の人たちには此上も無く有難がつた。

『なアに、明日の百より今日の五十だ。青年の衆がやつてる事ア彼りや酔狂の仕事で、身上を持つてない者にやアそれも可かんべえが、世帯持にやア仕方が無いだ。』

と、斯う公言する人が段々殖えて来た。抜け買が次第に多くなると見えて、青年會の賣れ高は日増に減つて行く。幹事の鈴木と云ふのが之を憤慨して或夜信託會社の賣店の前に立つて、此店に買ひに来た一人二人を殴つたのであつたが、此事が會社に發見されると、會社は直ぐ營業妨害の廉を以て之を告訴した。鈴木は直ぐに警察に引かれた。

此うした後には、會社は臆面も無く様々の手を盡して客を引いた。村民は續々として又會社の門に走つた。青年會は會長の草村を始めとして、熱心に此類勢を盛返さうとしたが、それは多數の村民の反抗を買ふ許りで、草村以下の青年會員は獅子身中の蟲の如く言ひ做された。殊に草村は無邪氣

な青年を驅つて邪道に赴かしめるものであると云つて、惡魔か毒蛇の如くに攻撃された。とうとう青年會の賣物は一人も買手が無い程になつて了つた。明星村の平和を攪亂するものは明星青年會である、青年會は村民の公敵であると云ふ聲が、村の輿論になつて、不買同盟は遂に全たく失敗に終つた。

四 親切の内に凜然たる決心

勝ち誇つた會社はモウ誰に遠慮する事も無い。飽くまで圖々しい態度を示して、會社派の村會議員は遂に多數決を以て落合虎雄を村長に選舉した。これには流石無神経な村民も少なからず激昂して、租税の滯納は今迄よりも更に酷くなつて来た。落合村長は就任匆匆々々役場の中を改革して、自分都合の悪るいは悉く免職して、自分と會社に都合の好い者ばかりを採用した。そして役場へ出勤するには三日に二日位で、實際に村治を見るでも無く、人民の休戚を見る事恰かも川向ふの火事を見るに異ならなかつた。

然も滞納處分は遠慮會釋なくした。

役場の外部に向つても落合はドシ／＼改革を試みた。その改革と云ふのは、第一は明星小學校長と相談して桑田訓導を休職にした事である。照子は品行の點に疑ひがあると云ふ名目で、とう／＼此様な運命に出遭つたのである。次は望月准訓導が首を斬られた。此若い教員は別に落度があるでも無かつたのに、單に前校長に同情を寄せて、山梨新校長に敬意を表せぬ――換言すれば阿諛を使はぬので免職されたのである。そして女教員の後任には望月たか子と云ふ山梨の親戚の女が近所の學校から轉任して來、准訓導の代りは講習出の何にも知らぬ青二才が採用された。

休職になつた照子は、詮方なく／＼清水市の或る小學校へ勉め口を運動して、幸に先方では承諾して聘ぶ事になつたのであるが、市から前任地の郡へ交渉があつた時に、郡では教員缺乏の折から一人たりとも他郡へ出す譯には行かぬと強硬に抛ね付けた。それでも休職にする位なら入らないのであらうからと言ふと、いや、それには少々事情があつての事であるか

らとて、如何しても聞き入れてくれぬので、照子は新らしい職業を求め事も出来ず、俸給も無ければ固より實家とても富めるでも無い身の上とても生活が出来よう筈が無いので、怨みを吞んで父の許へ引上げようとするど、宿の主人大和翁は、

「如何も何ともお氣の毒千萬の次第でして、畢竟私どもの盡力の行届かなかつた爲ですから、どうかお心置なく、拙宅に居て下さいまし。ナニ其内には又私が御盡力申して、何とかお顔の立つ様にしますから。」と、親切の言葉、照子も餘つ程その親切に甘へてと思つたけれども、大和の家には既に長谷川巡查が厄介になつて居るので、其上自分までと言ひ兼ねるので、

「御親切は眞に有難いんで御座いますが、私は兎に角参ります所が御座いますんですから、お暇致す事にしませうよ。長谷川さんが居らつしやるのに、その上に御厄介になることは……」と、云ふと、大和翁は阿々と笑つて、

「はい、その御心配ですか。それは御無用です。お一人やお二人、三年や五年食つて下すつても別に身代限りをするなど云ふまでの心配はまだ御座いませぬよ。はい、それに先生何ですよ。そんなお身體にして如何してお歸し申せませう。明星村の耻ぢや御座いませぬか、此の大和の耻辱にもなりませんよ。」

「でも餘まり……」

「御窮屈ぢや御座いませうけれど、暫時の御辛棒です。邪は正に勝たずと加申しまして、ナニこれも一時の變態で、村民だつて睡りつ切りに睡つちや了ひませんでせうから。」

大和の言葉の底には、親切の内に凛然たる決心を含んで居るので、照子も不義の奴どもにオメく逐出されて逃げて行くのを心外に思つて居る際であるから、遂に大和翁の好意に任せて、尙暫らく此處に留まる事とし、近所の子供に裁縫を教へたり夜學をしてやつたりして、一月二月の日を過ごした。

一方落合村長と山梨校長は、此間に謀議を運らして、村會の決議も一瀉千里、知事の許可も瞬く内に済まして、愈々小川に明星小學校の移轉改築工事を始めた。其工事に着手する日、春日などの人民は激昂して妨害を試みたが、その妨害した者には直ぐ租税の督促令狀を突付たり、買物に行くと會社で賣るのを拒んだり、駐在所に呼出したり、又説諭と稱して役場へ呼出したりして、それに應せぬ者は郡役所へ報告して、行政執行法で處分したり、騷擾罪で告發したりした。それで二三日すると、人民はモウ一人も反抗するものは無くなつて了つたのである。

五 捨て鉢

今日は村民の内、頑固と呼ばれて居る夕月の音右衛門と云ふ農夫が、村役場へ呼ばれて、説諭を受けて居る。落合村長は嘲ける様な顔で音右衛門を見下げて、

「どうだ、そんな強情を張らずに、子供を學校へ出席さしては……」

と、云ふと、音右衛門はケロリとした風で、

「村長さん駄目だア。」

「駄目と云つて、出さなけりやお前の子供は一生文盲で居なきやならない
「文盲で結構だ。農夫にやア字は要らねえだ。」

「昔ならそれで通るが、文明の今の世ぢや、そんな頑固な事を言つても仕方
方が無い。子供が一生涯怨むぞ。」

「いんにや、學問なんか覺えて、村の人を窘めたり、税を高くしたり、恐
かねえ會社なんて云ふものを拵らへたりする野郎の様な眞似はさせたくね
えだ。天道さまから頂いた大切の子供を人非人にしたくは無えだ。」

「なに？生意氣な事を言つて。」
と、落合は覺えず顔に朱を漲いだ。

「怒る事ア無えだ。村長さん、學問なんて詰らねえものを覺えると、誰で
も理窟なんか捏ね廻はして見たくなつて、碌な事は仕出來さねえもんだ。」
落合は胸を撫つて、

「そんな無法な事を言つたつて仕方が無い。どうしても出席させぬと、郡
役所へ呼出されたり何か、第一お前の迷惑になるんだが。」

「村長さん、そりやア不可え。そんな事された日にやア其日暮しの俺等に
やア食つて行く事が出來ねえだ。それども隙ア潰しただけの日當でも呉れ
るだか。」

「そんな事が出來るものか、お前はそんな事言ひ乍ら、山梨さんの地所を
荒らしてると云ふぢや無いか。」

「小作するつて借りてある内は、荒らさうと荒らすまいと俺の勝手だ。世
話は焼いて貰ひませえ。」

「お前は何も解らないから然云ふ事を言ふが、大切の土地を遊ばして荒ら
すと云ふには、何の位勿體ない事だと思ふ事を知らないのか。」

「ヘン、その位ゐの事は百も承知だから荒らすんだ。村長さん、俺アこれ
でも些たア考へを持つてゐるだよ。」

「その考へを持つてゐる人が何故無益に田畑を荒らすんだ。」

「これでも人助けになるだ。分らなきや聞かせてやるべえが、作米は年々騰貴る計りで、加之に肥料は高くなる。切めて肥料でも地主の方で買つてくれると云ふなら分つてるが、それもしないので、唯々取上げる計りだ。それで今ぢや幾ら働いても働いても、地主の倉へ運ぶ計りで、小作人の懐にやア米一俵だつて這入るぢや無い。實際働いて合はない勘定になつて居るだ。それでも誰も彼も、耕作を止めて了やア直ぐ其日からピツタリ食ふ物が無くなるで、合はねえと知りつゝ、段々借金が殖える事を承知で、苦しい思ひをして作つて居るだ。こんな事ちやア二年か三年で此村は行きつまつて了ふ。俺はそれが厭さに地所を荒らして居る。と云つた許りぢや分るめえが、俺は村中の地主の持つてる地所を皆な地主に返して、一人も作手手無い様にしたら、地主も些たア目が覺めて、小作人を大切に作る氣が出るかと思ふだ。それで俺は皆なに魁をして地所を突返してやりてえと思ふけれども、今茲で返して、ハア然かと引上げられて、外の人に作られちやア間職に合はねえ。そこで辛くてもジツと辛棒して、借りたまゝにして

置いて、思ふ存分荒らしてやるだ。なアに作米は一文でも拂ふこつちやア無えから大丈夫だ。此うして村の衆が皆な俺の通りにすりやア、譯は無え、村中の地主の地所は皆な草原になつて了ふだ。面白い、この位ゐ氣持の好い事は無え。」

音右衛門は愉快そうに聲を揚げて笑ふのだ。落合村長は色を失つて、「こ……これ何を云ふ。馬鹿な事を言ふもんだ。」

「いゝや馬鹿ぢや無え。」

「耕作しなけちや食ふ事が出来ないぢや無いか。」

「その積りで食ふ物だけア残して在るだ。」

「その食ふ物が盡きたら如何する。」

「それ迄にやア地主の方で降参するだよ。」

「馬鹿な事を言へ、降参などはせん。」

「降参しなきやア勝手にするが可えだ。取りに来たつて遣る物は無し、爲ねえと云ふ者を取捉まへて耕作させる事もなりやしめえ。」